

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第 71 号

出現期の製塩土器支脚 —久美浜町こくばら野遺跡の製塩土器と出土遺構をめぐって—	----- 田代 弘 --	1
浅後谷南遺跡の発掘調査	----- 黒坪 一樹・石崎 善久 --	15
下植野南遺跡(下層)の調査	----- 竹下 士郎 --	21
—平成10年度発掘調査略報—	-----	27
16. 奈具岡遺跡第9次	21. 長岡京跡右京第615次(7ANHIJ-6)	
17. 左坂古墳群D・E支群	22. 長岡京跡右京第620次(7ANKNA-2)	
18. 太田遺跡第8次調査	23. 下植野南遺跡範囲確認調査	
19. 余部遺跡第5次調査	24. 木津川河床遺跡	
20. 中海道遺跡第49次	25. 興戸宮ノ前遺跡第3次	
資料紹介 梅谷瓦窯跡出土の特異な道具瓦について	----- 奥村 茂輝 --	41
府内遺跡紹介 83. 天皇ノ杜古墳	-----	45
長岡京跡調査だより・68	-----	47
センターの動向	-----	49
受贈図書一覧	-----	51

1999年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 出現期の製塩土器支脚

—久美浜町こくばら野遺跡の製塩土器と出土遺構をめぐって—

田代 弘

## 1. はじめに

若狭湾西端に位置する久美浜町こくばら野遺跡において、7世紀後半から8世紀初頭頃に製作・使用された中実の製塩土器支脚が出土している<sup>(注1)</sup>。この資料は、報告の際に煮沸容器に伴う土製支脚と推定されたが、後に、秋山浩三によって製塩土器支脚として再評価された<sup>(注2)</sup>ものである。

舞鶴市浦入遺跡群出土の製塩土器を検討する作業の過程で、こくばら野遺跡出土遺物を検討する機会<sup>(注3)</sup>があり、この支脚を観察した。この際に、土製支脚とセットとなる製塩土器容器とみられる土器片を新たに確認することができ、土製支脚が土器製塩用であるとの確証を得ることができた。本資料は、従来、9世紀と推定されてきた若狭湾岸の中実製塩土器支脚の年代を大きく遡らせるものであり、今後、当該地域の律令期の製塩土器の展開をみる上で重要な位置を占めると考えられる。本稿では、この時に観察した所見を記すとともに、遺跡の性格の一端について私なりの意見を述べることにしたい。

## 2. 遺跡の位置と概要

### (1) 遺跡の位置

こくばら野遺跡は、久美浜湾の東岸の熊野郡久美浜町大字甲山小字君原野に位置する。川上谷川河口域を南に望む標高11~12mの段丘上に立地している。川上谷川河口には潟が存在していたとみられ、段丘裾の沼から河口域にかけて湿潤な低地が続いている。かつてはこの段丘は潟に面していたのだろう。内陸約1kmのところには海部の所在を示すとみられる海士(あま)の地名がみられることも、本遺跡の性格を考えるうえで興味深い。現在この遺跡を訪れると、丘陵上に孤立するような観があるが、生活領域に河口域の汽水域を含み、漁撈的性格を有する遺跡であるといえるだろう。この遺跡の側を南北に走る街道に沿って、日光寺遺跡や長良遺跡<sup>(注4)</sup>、奈良時代の集落遺跡が確認されている(第1図)。



第1図 こくばら野遺跡と周辺遺跡(1/100,000)

1. こくばら野遺跡
2. 晴雲遺跡
3. 浦明遺跡
4. 日光寺遺跡
5. 長良遺跡

(2)遺跡概要

当遺跡は、国道178号線バイパス建設工事に伴う発掘調査で発見され、飛鳥時代から奈良時代前葉にかけて営まれた集落遺跡であることがわかった。竪穴式住居跡11基・掘立柱建物跡15基・土坑・ピットなどの遺構に伴って土器類などが検出されている(第3図)。建物跡群は、出土遺物や建物の重複関係の検討から、竪穴式住居群が飛鳥時代から奈良時代初頭にかけて営まれ、廃絶後に掘立柱建物群に移行すると推測されている。掘立柱建物と竪穴式住居群は共存しないこと、竪穴式住居は幅10mほどの範囲に列状に規制的に配置されていることなどが指摘されている。遺物の上では須恵器の供膳形態に律令的土器が多くみられることと、漁網用の土錘が多く出土すること(第2図)に注意しておきたい。

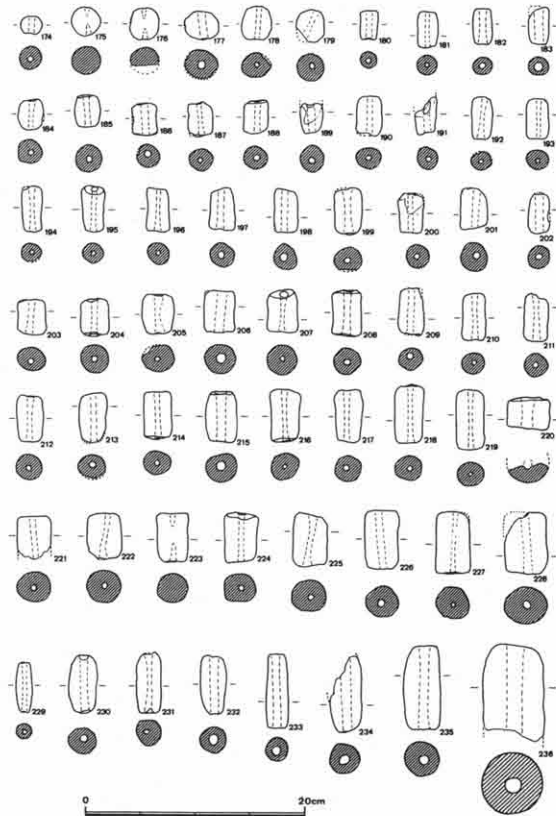
奈良時代初期に竪穴式住居から掘立柱建物へ転換することについて、森島康雄は、713年の丹後分国など律令国家による中央集権的体制強化策と連動するとみた。また、本遺跡を、奈良時代の掘立柱建物跡群が検出された日光寺遺跡・長良遺跡とともに、古代の丹後国熊野郡田村郷を構成した集落と推定した。<sup>(注5)</sup> 森下 衛は、律令社会成立期に、一般村落が竪穴式住居から掘立柱建物へ変容する過程を示す好例ととらえている。<sup>(注6)</sup>

3. 製塩土器について

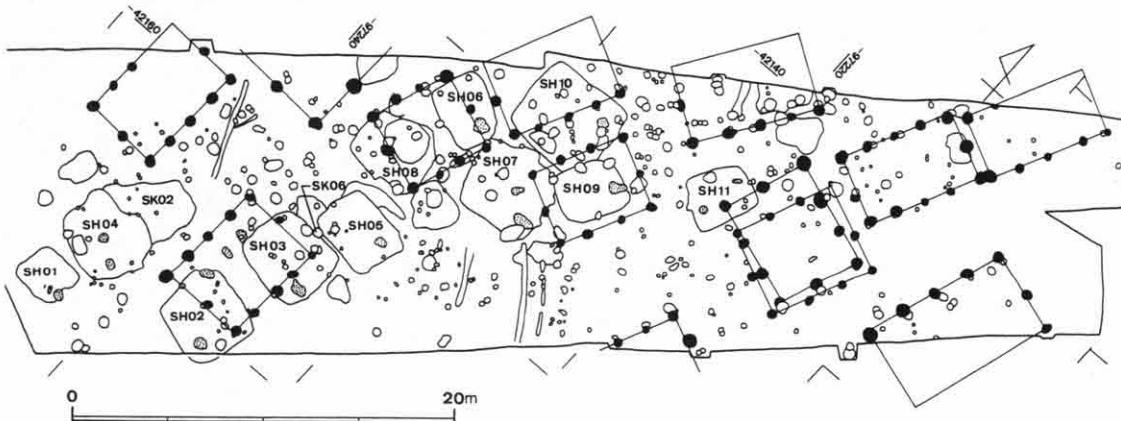
製塩土器は、竪穴式住居跡と周辺のピット・土坑から散発的に出土している。

(1)製塩土器容器(第5図1~6)

遺構に伴うものには図示できるものはないの



第2図 こくばら野遺跡の土錘

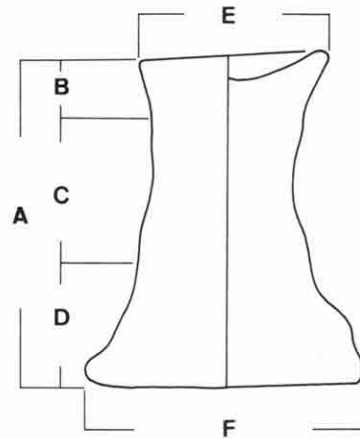


第3図 こくばら野遺跡遺構配置図

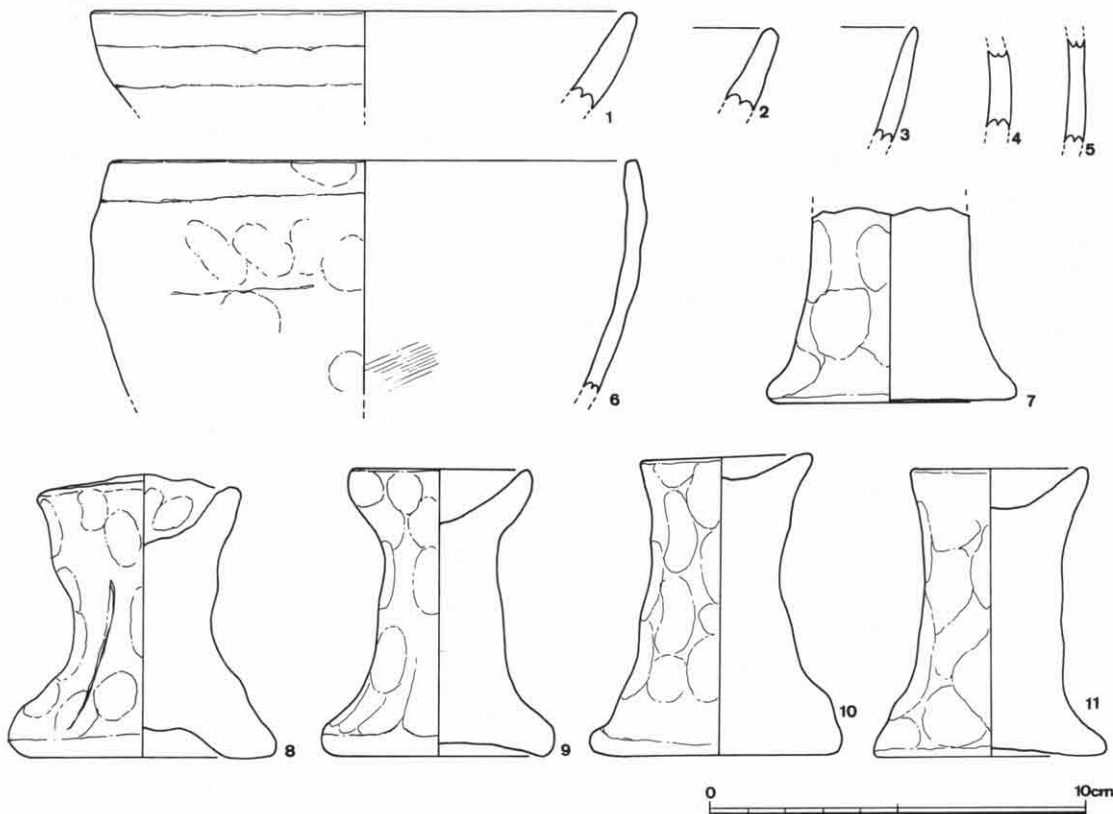
で、包含層から出土した資料を取り上げる。製塩土器容器とみられるものには土師質と須恵質のものがあり、前者が主体的である。後者は1点のみ認められた。土師質の製塩土器容器(第5図1~5)は、口縁部が外に直線的にひらく鉢形と推定される。1は、口縁部である。器体の厚みは約7mmで、口縁端部は丸く脆弱につくられている。胎土に砂粒を多量に含む明橙色の土器で、二次的な被熱を受けて劣化・赤変している。器体外面には粘土紐接合痕を顕著に残す一方、内面は平滑に調整される。口径は約15cmと推測される。石川県羽咋市寺家遺跡S B T 16<sup>(注7)</sup>に類似する形態・法量をもつものであろう。2はこれとほぼ同じ形状をなす個体である。3は器壁が5mmの薄手の個体で、口縁部を薄く仕上げている。4・5は体部細片である。

6は、包含層から出土した須恵質の容器である。報告では須恵器鉢とされたものだが、以下のような特徴をもつ須恵質の製塩土器である。

器体は直口砲弾型であり、口縁部はしっかりとつくられる。器体内面はナデ調整により平滑に仕上げている。下半に一部ハケメが認められる。外面には指頭圧痕と粘土紐の痕跡を顕著にとどめている。口径約14cm前後と推定され、土師質の製



第4図 製塩土器支脚各部名称  
A:全長 B:受け部 C:脚柱部  
D:底部 E:受け部上面  
F:脚部底面



第5図 製塩土器実測図

1~7・11:包含層 8:S H03 9:S K012 10:S K06

付表1 製塩土器支脚法量

番号	全長 (cm)	受部径 (cm)	底部径 (cm)	出土遺構
7	*	*	6.7	包含層
8	7.5	5.5	7.1	SH03
9	7.6	5	6.3	SK02
10	8	4.7	6.7	SK06
11	7.7	4.8	6.2	包含層

塩土器と近似する法量をもつ。焼成は、須恵質と土師質の中間的な様相を呈し、胎土は砂質である。福井県大飯町岡津遺跡に須恵質を呈する浜欄ⅡB式<sup>(注9)</sup>があり、これに類する焼成である点を指摘しておきたい。

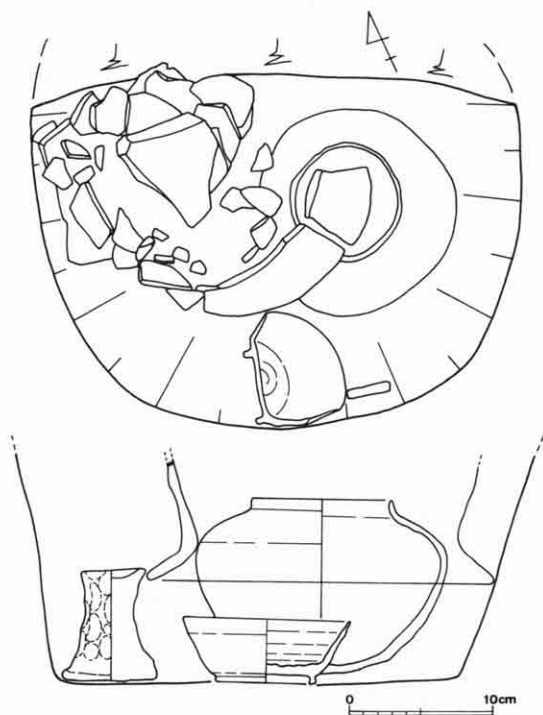
(2) 製塩土器支脚(第5図7~11)

製塩土器支脚は、遺構に伴う3点と包含層出土の2点がある。包含層資料のうち1点は新たに確認したものである。それぞれの法量は付表1に示した。なお、支脚各部名称は第4図のように用いたい。

土製支脚は、製塩容器と同様、砂粒を多く含む明橙色の胎土をもち、器表には指頭圧痕が顕著に認められる。いずれも二次的な被熱による変色、破損が認められる。受け部上面のみがていねいにナデ調整されている。受け部の形状から二つの型式が認められる。受け部を拡張して開くものA類(8・9)と、あまり開かないB類(10・11)とがある。A類は受け部が深く底面もくぼませている。

支脚は棒状にした粘土塊の上下を拡張するだけの手捏ね土器である。器体がねじれているので、棒状粘土塊をねじりながら引き延ばして脚柱部をつくり、その後に受け部と脚部をつまみ出したものらしい。若狭湾最古段階に位置づけられる傾式の支脚に同様の特徴がみられるものがあり、製作手法上の特徴として注意しておきたい。これらは受け部の形状に若干の差があるが、ほぼ同一法量を有している。

さて、支脚の帰属時期についてであるが、第8図を参照されたい。森島によると、こくばら野



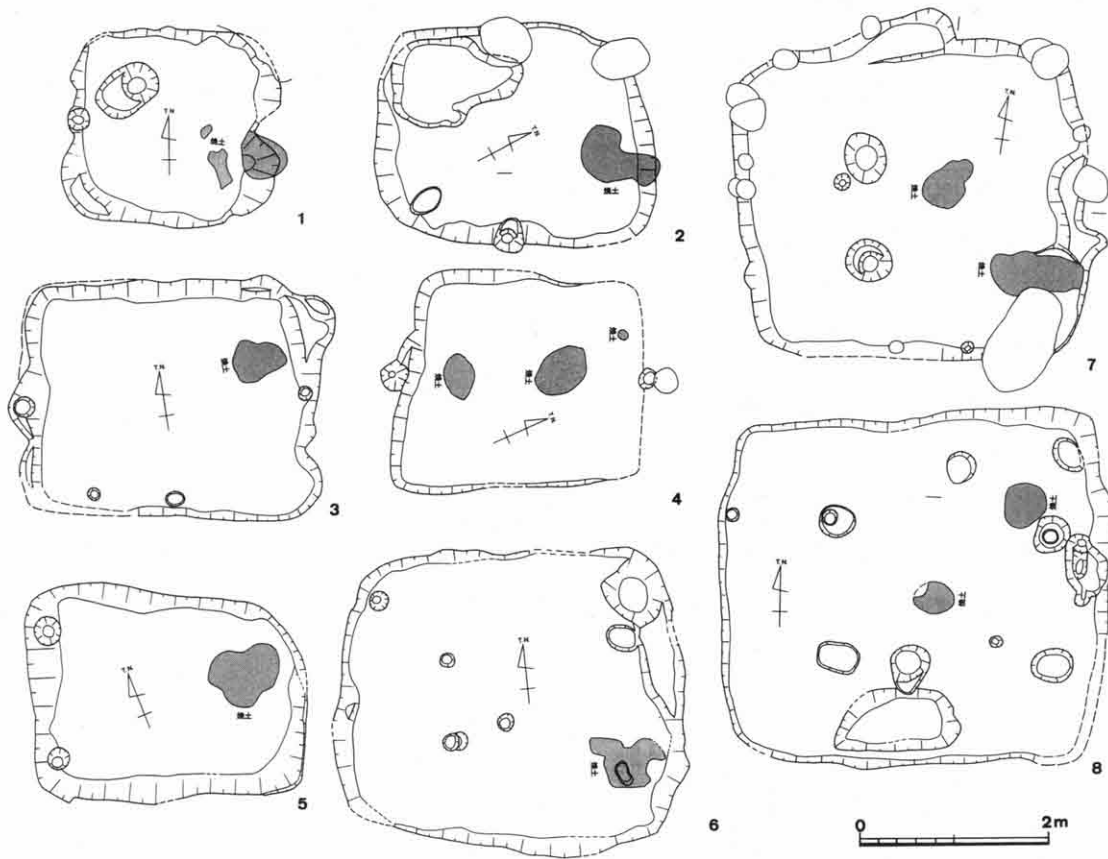
第6図 SK06遺物出土状況(原図を一部改変)

遺跡の竪穴式住居群は7世紀後半期に営まれはじめ(SH09・SH10・SK06)、8世紀初頭に終焉を迎える(SH03・SK02)。今回図示した支脚のうち3点はこれらの遺構に伴うことから、支脚はこの時期に製作使用されたものであることは確実である。

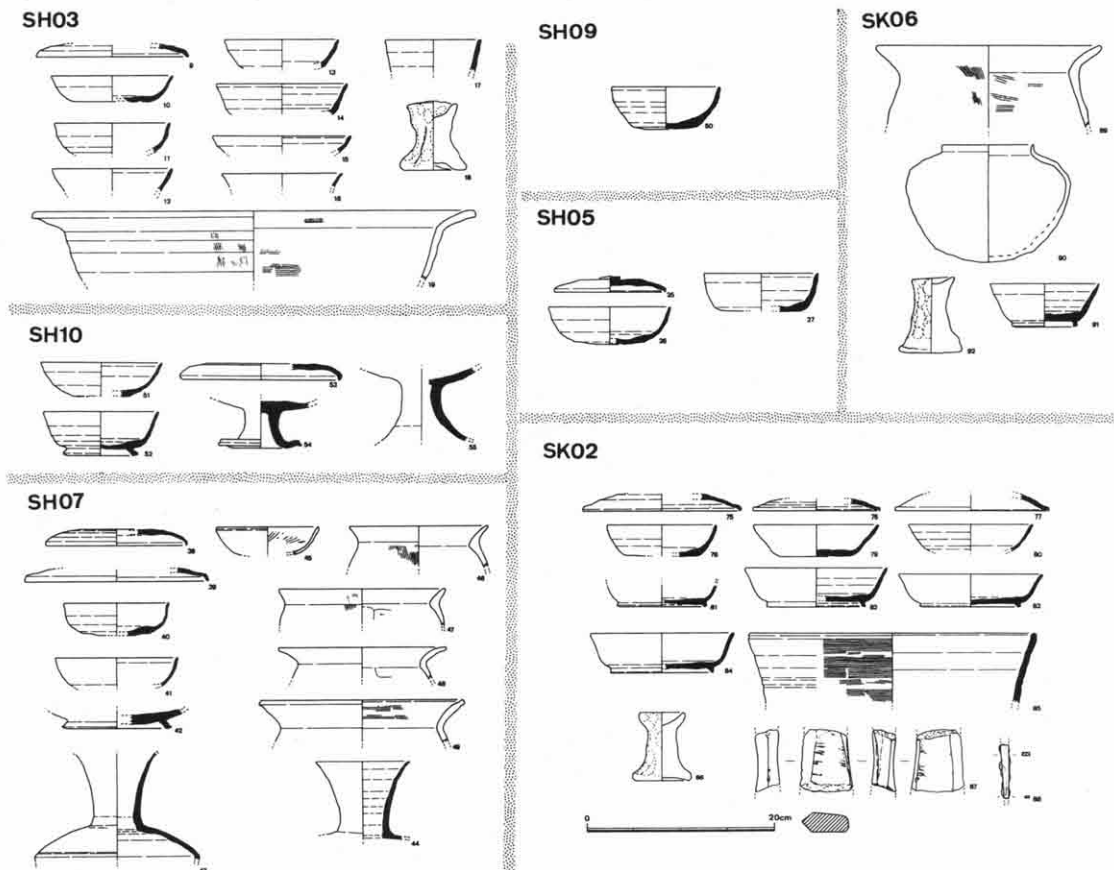
支脚は、受部や底面形状に若干の形態差が認められるが、器高が約8cm前後にまとまりを持つので、同一型式とみておく。直線的に立ち上がる口縁部を有する製塩土器容器とともに、本型式を「こくばら野式」と呼び、傾式に先行する型式として位置づけることにしたい<sup>(注10)</sup>。

(3) 埋納された製塩土器支脚

土坑6は一括埋納遺物として共伴関係の最も確かな資料であるので、特に記しておく。この



第7図 竪穴式住居跡実測図



第8図 各遺構出土遺物

土坑は、竪穴式住居跡3と5の間で検出された直径40cm前後の土器埋納遺構である。土坑の中に焼成不良の須恵器短頸壺を正置し、これに土師器甕を倒置して合わせ口にして被せたものである。その横に正置した須恵器杯身と、製塩土器支脚を配置する(第6図)。須恵器は8世紀初頭のものであろう。<sup>(注11)</sup>

このような埋納遺構は都城において検出事例が多い。都城における埋納遺構を多角的に検討し、鎮祭の復原とその背景を考察した上村和直によると、埋納遺構は埋納された品々やその位置によって地を鎮める鎮祭に関わる遺構と、住民の栄進を願う衣胞に関する遺構に大別されるといふ。<sup>(注12)</sup> 本遺構がいずれに該当するかは判断できないが、儀礼的行為を伴う非日常的な呪術行為に伴うものであるらしい。

敦賀市衣掛山古墳群<sup>(注13)</sup>や和歌山県下の横穴式石室墳<sup>(注14)</sup>など墳墓へ製塩土器を供献する例は知られるが、律令期の呪的な土器埋納遺構に製塩土器支脚が伴出する例は若狭湾岸では初例である。本例は埋納遺構としての重要性に加えて、伴出した製塩土器の型式に年代の定点を与えるものでもあり、特筆すべき資料といえる。

では、製塩土器が使用されたとみられる竪穴式住居群はどのようなものかをみておきたい。

#### 4. 小形竪穴式住居について

竪穴式住居は11基あり、全て長方形である(第7・8図)。列状に分布することが特徴である。遺構相互の切り合いや主軸方向をみると、1号と4号、2号と3号、8号と6号、7号と10号、9号と11号というように主軸を同じくするものが単位として認められる。竪穴式住居は付表2のように3m前後の小形長方形を主体とし、4本の主柱穴を床面に配置するのは10号住居のみである。床に炉跡とみられる焼土が1～3か所あり、東辺に偏して分布する傾向がある。竈はない。

この建物群の特徴は、柱の配置場所である。建物の柱は細く、脆弱であり、床面に柱を作らず辺に沿って1～3穴を穿つAタイプ(1～5)と、床に主たる2穴を穿って小柱をそえるBタイプ(6・7)の2類型に大別できる。4本の柱穴がある10号をCタイプ(8)とすると、住居床面積はA→B→Cタイプの順に増加する。

柱の本数と太さは屋根面積や荷重に比例して増加するので、柱の構造や面積の大小によって上部構造をある程度類推することができる。

付表2 竪穴式住居跡の規模

きよう。A・Bタイプは、柱穴の規模、配置状況が極めて簡略であり、上部構造はいたって簡単なものと考えられる。このような小形建物の構造を考える上で、石野博信が記録、検討した琵琶湖東岸地域のホシ小屋<sup>(注15)</sup>、大阪府千里丘陵の作小屋<sup>(注16)</sup>などの民俗例が参考となる。ホシ小屋は

遺構名	規模(短辺×長辺)m	長軸	主柱穴の数と位置
SH01	2.6×2.8	東西	1、短辺中央
SH02	4.1×4.3	東西	2か、床面
SH03	3.9×4.6	東西	2、床面
SH04	4.5×4.5	東西	不明
SH05	3.1×4.1	東西	2、両短辺中央
SH06	2.8×3.6	東西	2、西短辺
SH07	4.3×4.6	東西	2、床面
SH08	3.5×4.2	東西	不明
SH09	3.0×3.7	南北	2か、両長辺中央
SH10	4.7×5.1	東西	4、床面
SH11	2.9×3.1	南北	2、両短辺中央

稲刈収穫用に毎年建てられる倉、作小屋は耕作時や収穫時に納屋として季節的に使用される小屋であり、どちらも農耕に関連して季節的に利用される仮設建物である。石野は、藁葺き長方形プランのホシ小屋を、屋根構造の違いによって、切妻屋根型・丸屋根型・片屋根型・切妻四柱造りの4形態に分類し、開口状況からさらに細分を行っている。

本例を、柱穴の位置を重視してこれらと比べてみると、柱が壁面に偏るAタイプは屋根が地面に接する片屋根構造が想定される。Bタイプは床の柱穴が西に偏っているので、片屋根か西側の短い切妻建物と推定できよう。

上部構造の明らかでない考古資料を民俗例と対比することは適切ではないが、これによって本例が簡略な構造をもつ竪穴式住居であり、また、こうした建物が7世紀末から8世紀初頭頃に必ずしも一般的な形態ではないということが理解されると思う。<sup>(注17)</sup>このような仮設的な建物を周辺で探すと、遠所製鉄遺跡や浦入製塩遺跡の工房群内にみいだすことができる。<sup>(注18)</sup>どちらも季節的で、専門性の高い集約労働現場と推測される遺跡である。

こくばら野遺跡の竪穴式住居跡群は、大半がホシ小屋や生産遺跡における仮設建物のように、臨時的に設営されて繰り返し利用された建物跡とみることはできないであろうか。構造上、農作業場や工房などのような季節的共同利用を目的とする仮設建物としての側面が強いように思われるのである。

## 5. 田村郷中男作物とこくばら野遺跡

熊野郡は、田村・佐野・川上・海士・久美の5郷からなる。<sup>(注19)</sup>

10世紀に編纂された和名類聚抄には、古代に海部が存在したことを示すアマベを名のる郡・郷名が17か所、関連地名が2か所記されている。<sup>(注20)</sup>このなかに丹後国熊野郡海士郷もみえ、海士が該当地名であると考えられている。海部は、もとヤマト政権の内廷組織の形成に伴って設置されたトモの一つで、部民制成立とともに海部と称した。海部は、非農業民である海人により構成された漁撈集団であり、沿海部に分布し、各地の海部直に率いられ、中央の阿曇連の統率下にあった。海産物貢納を行ない、水手などの航海技術者としても活動した。<sup>(注21)</sup>考古学的には、土器製塩の担い手として注目されている。<sup>(注22)</sup>

熊野郡海士郷は、久美浜町のほぼ中央を北流する川上谷川の中・下流域から久美浜湾東側にかけての地と推定され、その中心地は下流域の海士付近とみられている。海士村宮の奥には、若狭湾岸一帯を支配したとされる海部直の祖建田背命及びその子武諸隅命・和田津見命をまつる矢田神社が鎮座し、海部直の子孫が代々祝として仕えたとの伝承を残している。<sup>(注23)</sup>こくばら野遺跡が位置する甲山一帯は海士郷に属し、こうした海人の伝統を引く人々が居住した地域と推測される。

北に田村郷がある。田村郷は、平城京から田村郷名記載の貢進付札が出土したことで知られる。田村郷は、丹波国熊野評田村里、後の、丹後国熊野郡田村郷で、佐濃谷川下流域にある田村を中心とする地域であり、日光寺遺跡や長良遺跡などが同郷を構成した集落と推定されている。<sup>(注25)</sup>

さて、田村郷は平城京木簡に「丹後国田村郷神人丈万呂」、「丹後国田村郷刑部夜惠五斗」、「丹



後国熊野郡田村郷中男作物海藻一□」<sup>(注26)</sup>とみえる。中男作物海藻とあるのは、田村郷が調として海藻を貢納していたことを示しており、郷内に漁撈集団を内包していたことがわかる。先にみたように、こくばら野遺跡も遺跡立地や魚網用土錘の存在から漁撈的な性格を有していたとみられ、この遺跡を含む海部郷にも同様の賦役が課せられていたと推測される。

ところで、10世紀初頭に成立した律令格の施行細則を定めた延喜式よると、丹後国は漆・紙などの山の幸と烏賊・海藻などの海産物を宮都へ調として貢納することが義務づけられている<sup>(注27)</sup>。平城京出土木簡の墨書記載によって、8世紀にも丹後から宮都へ実際に海産物が貢納されたことが確かめられ、田村郷からの貢進付札がその一例である。

田村郷から運ばれた海産物として明らかなものは、中男作物として徴発された「海藻」である。中男作物は調の一種であり、中男作物記載の木簡には個人名記載が無く、国郡名のみが記されることが多いことから、その徴発・貢進は郡単位に行われた、と考えられている<sup>(注28)</sup>。田村郷とあるのは、郷単位で徴収した海藻を熊野郡衙でとりまとめて貢進したことを示すものであろう。

海藻・貝類などの海産物は、農繁期と重複する春先から初夏にかけて行われる、漁業活動によって得られる品々である。東野治之は、平城京出土の水産物荷札研究から、海産物を主とする贄や食物の調は漁民などの非農業民に課せられた税目であったとする<sup>(注29)</sup>。田村郷は、外洋へ通ずる内湾性の天然漁港を多数擁する久美浜湾岸にある。豊富な海産資源に恵まれた土地柄であり、郷内には多くの漁民が居住していたと推測される。郡司や郷司は、彼らの日常的な漁業活動の場に産する海藻をはじめとする海産物を、中男作物として徴収していたのである。

海藻とあるのはワカメ・ニギメである<sup>(注30)</sup>。ワカメには生物と干物があり、前者は春に贄として献上され、後者は秋に調として貢上されたい。生ワカメは腐敗を避けるために塩をまぶした半乾燥状態のものをまとめ(籠)、干ワカメは幾日も浜風にさらし、加工海産物として束ねて(連)、官衙に供出した<sup>(注31)</sup>。海草類採取は、漁民各々による採取活動が基本であったと思われるが、保存処理・加工した多量の海藻類を調として期日までに供出するとなると、短期に集約的な協業が行われたとみなければならない。保存料としての塩生産や加工処理過程で多くの人手が必要となるからである。本来、海を生産活動の場とする漁民の個別労働が、賦役という公権力の介入を契機として、陸上での季節的な協業へと再編される姿を、ここにみることができる。

製塩遺跡における労働編成は、この典型的なものといえる<sup>(注32)</sup>。製塩遺跡や製鉄遺跡などにみられる仮設的な建物は、こうして集約された労働形態の一端を反映するものであろう。宇野隆夫によると、律令期における工房は「堅穴建物であることが多く、堅穴建物は工人身分の表示という性質」<sup>(注33)</sup>が想定されている。こくばら野遺跡にみられる小形堅穴式住居は、律令期生産遺跡における堅穴式住居や仮設建物と類似した性格を推定しておきたい。

このように、こくばら野遺跡は生業の一部として漁撈を行い、中男作物として海藻を貢納するような臨海性の遺跡とみることができるのである。

## 6. まとめと展望

以下に、成果と問題点を若狭湾の土器製塩遺跡との関連を念頭に置いて、まとめておく。

### (1) こくばら野遺跡の製塩土器と遺跡の性格

本遺跡には製塩土器が炭・灰とともに大量に集積する製塩遺跡特有のありかたはみられず、製塩土器容器・支脚の土器総体に占める割合もわずかである。都城や内陸の消費地出土製塩土器と良く似た出土状況であり、塩の消費形態を示すものといえよう。<sup>(注34)</sup>

生産現場で得られる塩の主体は粗塩であり、これは水分を含んで潮解しやすい性質をもっているため、散状塩ないしは固形塩を必要とする場合には、潮解の原因物質であるニガリを加熱して焼く、焼き塩を行なうことが必要となる。<sup>(注35)</sup> 内陸の消費地で出土する製塩土器の大半はこうした焼き塩容器が搬入されたものである。山中 章による都城出土製塩土器の研究によると、焼き塩壺は貢納用の規格品として作られ、官給品としても流通した。都城における焼き塩壺の生産・使用は平城Ⅰ期に始まり、その後、古代の宮廷社会に欠かせないものになっていく。ニガリが少ない焼き塩は、食卓塩として食膳に供され、少なくとも宮都内では階級・階層の差なく使用された。<sup>(注36)</sup>

本遺跡の場合、集落内に備蓄された粗塩を、自家消費するに際して製塩土器が使用されたものと考えたい。塩は調味料として使用されたのはじめ、水産物加工食品の生産に供すべく、焼き塩をした。製塩土器は近在の製塩集団から入手したか、あるいは使用者自身が土器製塩に従事するなど、製塩土器を入手しやすい立場にあったのであろう。

白石太一郎は、官主導の大規模な塩生産の様態を考察したなかで、対局をなす漁業村落を構成する郷戸単位の調物生産に伴う、小規模な塩生産のあり方をみる必要を説いている。<sup>(注37)</sup> 本例は、この小規模生産に付随する塩の消費形態を示す事例として評価できるのではないだろうか。

### (2) 若狭湾岸における本資料の意義

**中実支脚と中空支脚** 「こくばら野式」は飛鳥時代のものであることが確実視されるので、石川県下を中心として分布する糸巻形支脚と若狭湾岸に展開した中実支脚との関連が問題となる。糸巻形支脚は中空支脚であり、石川県寺家遺跡S B T 13・16出土例、福井県三国町川端遺跡住居跡出土例から8世紀第1四半期には出現した型式である。<sup>(注38)</sup> 中空支脚は中実支脚よりも一世紀前後早く出現するとみられてきたが、本資料が得られたことによって逆に中実支脚が古く位置づけられた。これにより、中実支脚と中空支脚は遅くとも、8世紀前半までには出現していたことが確認できる。

このことは、独立支脚を伴う土器製塩が8世紀前半までには北陸から丹後という広い範囲において成立をみていたことを示すものである。中実・中空を問わなければ、この地域には船岡式にはじまる大型平底土器受容以前に、支脚を有する土器製塩が在地様式として成立していた可能性を指摘しうるのである。事実、こくばら野式は若狭において浜欄ⅡB式から船岡式へ移行する時期の資料であり、戸潤幹夫の能登半島における研究や石川県寺家遺跡の調査成果は、8世紀前半に大型平底土器と中空支脚を用いる小型容器という二種類の製塩土器が共存することを明らかにしている。<sup>(注39)</sup>

年代	小期	若 狭	寺 家 遺 跡	支 脚
700	I			
	II <sub>1</sub>			
	II <sub>2</sub>			
800	III <sub>1</sub>			
	III <sub>2</sub>			
	IV			
900	V			
	VI			

若狭 (1:宮留遺跡 2:岡津遺跡 3・4:船岡遺跡 5:川端遺跡 6・7:釣姫遺跡  
 8・10~12:傾遺跡 9:阿納塩浜遺跡 13・14:吉見浜遺跡 15・16:塩浜遺跡)  
 寺家遺跡(能登外浦) (17:SBT05 18:SBT32 19・20:SBT16 21:SBT06  
 22:SBT10 23・24:SBT13 25:SBT03 26:SBT26 27:SBT11  
 28:SBT22 29:SBT17 30:SBT12 31:SBT29 32:SBT12 33:SBT24  
 34~37:SR01周辺 38:SBT09覆土 39:5I3-4層 40・41:SR01  
 42~48:SS01 49・50:大型建物周辺 51:SO06 52:5G6-4層 53~55:5I1-2下層

第9図 北陸の製塩土器編年(小島・宇野1989)

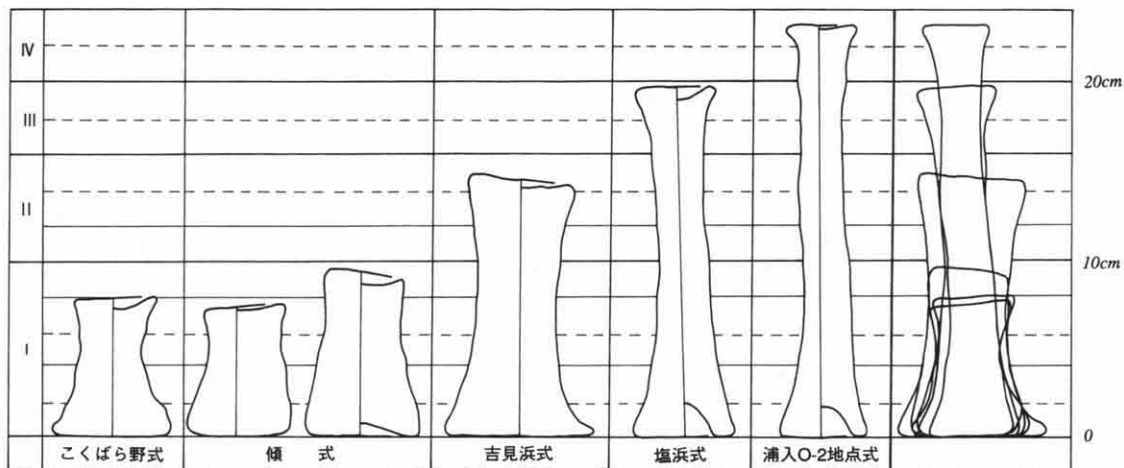
古式の独立支脚は、舞鶴市浦入遺跡群においても奈良時代前半に遡る中実の独立支脚の出土をみており、能登半島外浦の米浜遺跡でも8世紀半ばに中実支脚が出現するなど、今後、面的に拡大する兆しがある。中空・中実支脚の出現背景と展開、そして大型平底製塩土器との関連を追求していくことが今後の課題となろう。

**若狭湾の製塩土器編年との関係** 古式の中実支脚の存在は、若狭地域での製塩土器の変遷観に少なからぬ影響を与えるものである。小浜市域を中心とする若狭地域の製塩土器の研究成果によると、中実製塩土器支脚を伴う土器製塩は、若狭湾岸で独自の発展を遂げたものであり、大型平底製塩土器である船岡式が消滅した、8世紀末頃の傾式を初現とみるのが現在の定説となっている<sup>(注40)</sup>。本例はこれを大きく遡らせる資料であり、従来の編年観や歴史的 position 付けを見直すことをせまるものである。

傾式は、高さ7cm前後の小型中実支脚に阿納塩浜遺跡出土品のような2リットル前後の容量を有する砲弾形の丸底容器が伴うものとして編年表に掲示され、船岡式に後続する主たる煎熬容器として位置づけられてきた。しかし、製塩土器製作手法の検討を基にした小嶋芳孝の編年案では、従来、傾式とされた丸底土器は傾遺跡から出土した小型平底土器と共に支脚より一段階古く、Ⅲ2期に位置づけられた<sup>(注41)</sup>。Ⅲ2期では平底土器と丸底土器が共存することを示しつつ、小型平底土器が船岡式からの形式的連続性を有するものとして組列されているのである。

この編年は平底土器の組列を重視したものであり、支脚を有する丸底土器がこの系譜にのらないものであることを明確にした。傾式と位置づけられた丸底土器と中実支脚との共伴関係は明確でなく、仮想されたものなのである。小嶋が指摘するような小型の平底土器がこの段階の煎熬容器の実体をなすものであろう<sup>(注42)</sup>。石川県下の大型平底容器は、石川県寺家遺跡で露地作り→底部円盤手法→型作りと製作手法を変えて小型化しながら9世紀後半まで存続するが<sup>(注43)</sup>、氏の推論のように若狭においても同様の型式変化をたどったとみることができるのである。支脚を有する丸底・砲弾形の製塩土器は、大型平底土器出現以降も傍系として存在し、大型平底土器衰退以降に顕在化するものである。

船岡式と呼ばれる大型平底土器は、調塩国として膨大な塩を貢納するために、律令国家主導の



第10図 若狭湾岸における製塩土器支脚の変遷(案)

もとで新たに導入された器種として、組織化された生産現場において使用されるものであった。<sup>(注44)</sup>これに対して、支脚を伴う丸底容器は調として貢納する海産物加工に必要な塩や、自家消費に当てる塩を生産する小規模生産形態のもとで使用されたと推定されるのであり、両者は本質を異にする故に分布を異にしているとも考えられる。こくばら野式の存在は、支脚を有する丸底・砲弾形の製塩土器が7世紀代に出現してから断続的に存続したことを示すものであり、船岡式終焉後に傾式として忽然と出現したものではないことを物語っている。Ⅲ2期以降は、煎熬専用容器が鉄製容器にとってかわられ、支脚を伴う丸底容器は焼き塩など製塩工程の後半を担う専用容器として特化していったことが考えられる。<sup>(注45)</sup>

以上の観点から、こくばら野式に併行する型式が、調塩国である若狭にも存在し、若狭湾を中心とする地域では中実土製支脚は第9図のように変遷すると考える。つまり、7世紀末に出現した器高7～8cmの支脚は長脚化をたどり、浦入0-2地点式に至って器高23cmと長大化する。浦入0-2地点式は12世紀中頃と推定され、これを前後する時期に土器製塩は終焉を迎える。<sup>(注46)</sup>対応する丸底容器は支脚と反対に小型化をたどるのであろう。第10図は吉見浜遺跡の考察編において示された支脚の変遷図にこくばら野式と浦入0-2地点式を加えたものである。傾式として提示された二つの支脚のうち小型のものについては、従来より年代を遡らせることができるのではないだろうか。

小稿が、若狭湾岸の土器製塩研究の一助となれば幸いである。

なお、本稿作成にあたっては、入江文敏、小山雅人、河野一隆、筒井崇史、畠中清隆、松川雅弘、水野和雄、水野聡哉、森島康雄、森下 衛、吉岡博之の諸氏にご教示頂いた。

(たしろ・ひろし＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

- 注1 森島康雄「こくばら野遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注2 秋山浩三「京都府(丹後)」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店) 1994
- 注3 舞鶴市教育委員会吉岡博之氏と同僚の森島康雄氏と、京都府丹波町須知にある(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの遺物収蔵庫において検討した。
- 注4 森島康雄「国道178号バイパス関係遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注5 注1と同じ
- 注6 森下 衛「京都府内における古代集落の展開」(平成10年度共同研究中間発表資料・予稿) 1998
- 注7 小島芳孝・宇野隆夫「北陸における塩生産」(『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会) 1989、第28図 北陸地方の古代製塩土器編年私案
- 注8 注1文献、報告番号163
- 注9 小浜市岡津遺跡から出土した椀形の製塩土器である。淡い灰色で全体に白っぽいものが多く、瓦質～須恵質に近い焼成のものが多い。大森 宏・森川昌和らはこれを浜瀬ⅡB式に後続するものとみ、「岡津式」として大型平底である船岡式出現前夜の様相をみいだした(福井県小浜市教育委員会『岡津製塩遺跡-第1次・第2次発掘調査報告-』1980)。これに対する入江文敏の反論がある。入江

は、若狭における古墳時代の製塩土器を首長墓の動向を踏まえた編年試案を示し、浜欄ⅡB式を第Ⅲ型式と位置付け、細別が可能であることを指摘した。この中で、岡津式とされた一群は第Ⅲ型式製塩土器の範疇で捉え得るものであるとし、第Ⅲ型式の下限をTK217型式に前後する時期のものともみた(入江文敏「若狭における古墳時代土器製塩についての覚え書き—大飯町大島浜欄・宮留遺跡の発掘調査から—」(『わかさのうみ—紀要Ⅰ—』 福井県立若狭歴史民俗資料館) 1986)。このように、当該資料については意見がわかれるところであるが、入江の意見が主流を占めつつあるようである。年代観を明らかにしうる具体的な資料の提示、資料の蓄積が待たれるところである。大飯町立郷土資料館、福井県立若狭歴史民俗資料館展示品をみせていただいた。実見に際しては、若狭歴史民俗資料水野和雄副館長、畠中清隆氏にお世話いただいた。

- 注10 遺物観察時の議論の中で傾古相として捉えるべきとの意見も出たが、時期や地域を異にしており、現時点では関連が明確ではないことから、本資料をこくばら野式と仮称することにした。
- 注11 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』 古代の土器研究会 1992  
『7世紀の諸問題』第16回両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流会資料
- 注12 上村和直「宅地と鎮祭」(『古代都城制研究集会第3回報告集 古代都市の構造と展開』 奈良国立文化財研究所) 1998
- 注13 敦賀市教育委員会『衣掛山古墳群』 1987
- 注14 益田雅司「供献された製塩土器」(『和歌山地方史研究29・30号』) 1996
- 注15 石野博信「琵琶湖東岸地域のホシ小屋—原初的建築様式の一つ—」(『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館) 1990
- 注16 石野博信「大阪府千里丘陵の作小屋」(『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館) 1990
- 注17 石野博信『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990
- 注18 遠所遺跡茗荷谷地区竪穴式住居跡11・12、鴨谷地区竪穴式住居跡21など。(『遠所遺跡』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注19 池邊 彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』 1981
- 注20 渡辺則文・近藤義郎「海部と製塩」(『古代の日本』第四巻 中国・四国 角川書店) 1970
- 注21 栄原永遠男「海部」(『新編日本史辞典』 東京創元社) 1980
- 注22 注2と同じ
- 注23 「熊野郡」(『日本歴史地名大系』26 京都府の地名 平凡社) 1981
- 注24 注19と同じ
- 注25 注1と同じ
- 注26 平城京出土木簡墨書記載。注19文献による。
- 注27 延喜式第二十四卷主計上 (『延喜式』中篇 吉川弘文館) 1981
- 注28 日本思想体系「賦役令」(『律令』 岩波書店) 1976、補注1 k 583頁上段  
今津勝紀「律令税制と流通」(『古代史の論点』3 都市と工業と流通 小学館) 1998、p. 243
- 注29 東野治之「木簡にみられる地域性」(『日本古代木簡の研究』 塙書房) 1983
- 注30 宮下 章「古代人の海藻」(『海藻』ものと人間の文化史11 法政大学出版局) 1974
- 注31 注29と同じ。
- 注32 岸本雅敏「古代の塩の意義」(『考古学による日本歴史』16 産業Ⅰ 狩猟・漁業・農業 雄山閣出版) 1996
- 注33 宇野隆夫「越における律令期的生産構造の展開」(『越と古代の北陸』 古代王権と交流3 名著出

- 版) 1996
- 注34 山中 章「焼塩の貢納と消費」(『日本古代都城の研究』 柏書房) 1997
- 注35 近藤義郎「第三章 土器製塩と焼き塩」(『土器製塩の研究』 青木書店) 1984  
白石太一郎「塩」(『日本歴史考古学を学ぶ』 下 有斐閣) 1986  
廣山堯道『塩の日本史』 <第二版> 雄山閣出版 1997
- 注36 注29と同じ。
- 注37 白石太一郎「畿内周辺地域における奈良時代の製塩遺跡について」(『古代文化』 第20巻第10号 (財)古代学協会) 1968
- 注38 注7と同じ。
- 注39 戸潤幹夫「能登式製塩土器—型式分類とその変遷—」(『北陸の考古学』 石川考古学研究会会誌 第6号 石川考古学研究会) 1983  
『寺家遺跡Ⅱ』 石川県埋蔵文化財センター 1988
- 注40 石部正志「製塩遺跡」(『考古資料の見方』 <遺跡編—地方史マニュアル5—> 柏書房) 1983  
『塩—生産の歴史 三千年—』 福井県立若狭歴史民俗資料館 1988
- 注41 『寺家遺跡Ⅱ』 石川県埋蔵文化財センター 1988  
注7と同じ。
- 注42 青森県下において、平安時代に土製支脚を伴う平底容器による土器製塩が行なわれていたことが確認されている。岸本雅敏氏から教えていただいた。
- 注43 注7と同じ。  
小嶋芳孝「平底製塩土器の検討」(『同志社大学考古学シリーズⅣ 考古学と技術』 同志社大学考古学研究室) 1988
- 注44 白石太一郎「製塩遺跡に関する考察」(『若狭大飯』 大飯町教育委員会) 1966  
宇野隆夫『律令期の考古学的研究—北陸を舞台として—』 桂書房 1991  
館野和己「若狭の調と贄」(『越と古代の北陸』 古代王権の交流3 名著出版) 1996
- 注45 岩本氏は、支脚をともなう塩作りは焼き塩とみている(岩本正二「7～9世紀の製塩土器」(『文化財論叢』 同朋社) 1983  
久保智康・本多達哉は「八・九世紀段階で鉄釜煎熬がある程度普遍的に存在したならば、支脚をともなう傾式以降の土器のセットがそのまま焼塩土器であった可能性もあろう」と述べている(「福井県(越前)」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』 青木書店)) 1994
- 注46 田代 弘「12世紀の土器製塩炉跡」(『京都府埋蔵文化財情報』 第69号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998  
塩浜式に後続する型式として、浦入0-2地点式を設定した。塩浜式は若狭地域の製塩土器の終末型式として10～11世紀初頭頃に位置づけられるものであるが、浦入0-2地点式は土坑一括資料によって12世紀中頃以降に製作されたものと判断した。支脚の形態は塩浜式に類似するが、最終調整が省略されるなど簡略化が著しくなるとともに、全長22～23cmと長脚化がすすむ。塩浜式の下限を示す資料ともいえるが、上記の特徴や若狭国と丹後国の境をなす大浦半島西部地域での発見であることなどを重視したものである。
- 注47 『吉見浜遺跡—若狭における土器製塩遺跡の研究—』 若狭考古学研究会・大飯町教育委員会 1974

# 浅後谷南遺跡の発掘調査

黒坪 一樹・石崎 善久

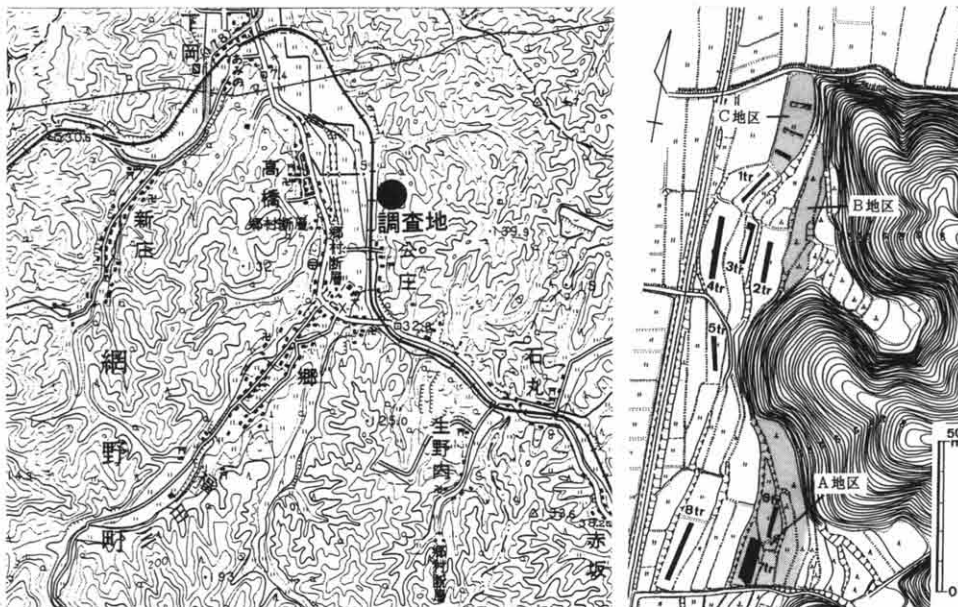
## 1. はじめに

浅後谷南遺跡は、京都府竹野郡網野町字高橋に所在する。今回の調査は、国営農地丹後東部地区開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。

浅後谷南遺跡は福田川東岸の丘陵裾部分に位置し、周辺の標高は約20mを測る。また、遺跡の範囲内には小谷地形や微高地が複雑に入り組んでいる。平成9年度の調査では広範囲にわたって、8か所のトレンチを設置し、遺跡の範囲・性格の把握に努めた。その結果、すでに報告したように第7トレンチで導水施設を検出した<sup>(注1)</sup>。

その成果を受けて、今年度は造成により削平を受ける部分を、2か所面的に調査することとした。また、昨年度実施できなかった開発予定地北部分の試掘調査を並行して実施した。南からA～C地区とする。今回はA地区の成果について概要を記す。なお、出土遺物についてはその大部分が未整理のため、詳細については今後整理を行っていく中で明らかにしていきたい。

福田川流域の遺跡の状況については明らかになっていない部分が多いが、河口部には日本海側最大の規模を持つ網野銚子山古墳が存在するほか、近年の調査によって、スガ町古墳群(前～中期)、妹古墳(前期)などの小規模古墳の実体が明らかになりつつある。また、遺跡の北にはガラス玉や鉄器を副葬した弥生墳墓である浅後谷南墳墓が位置している。一方、集落遺跡としては三宅遺跡・林遺跡などが調査されている。

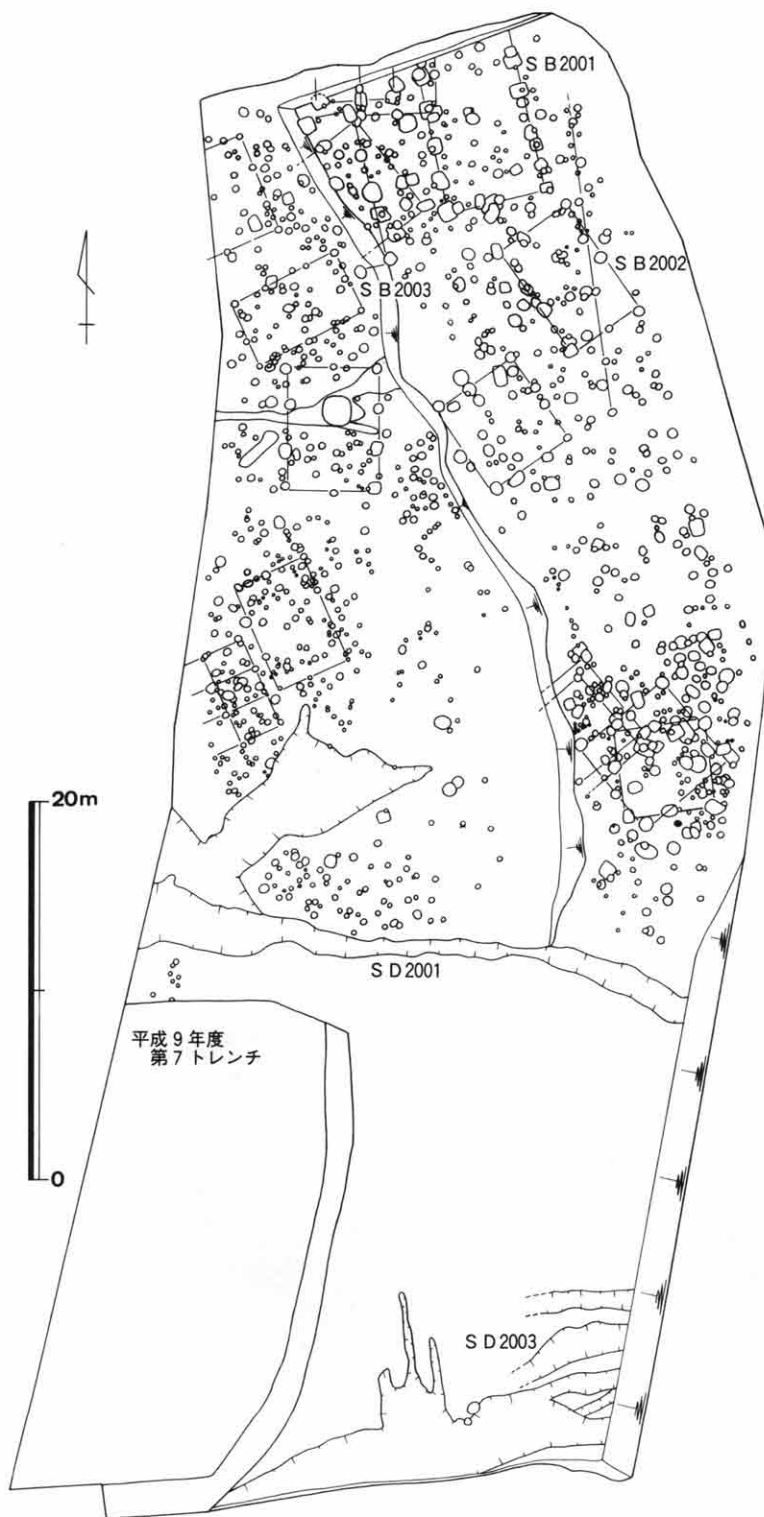


第1図 調査地位置図(1/50,000)および調査区配置図



## 2. A地区調査概要

昨年度、導水施設の検出された第7トレンチを中心に拡張した地区である。南北にそれぞれ微高地があり、中央部分は東西方向の深い谷地形を呈している。この谷地形は、部分的に断ち割りを



第2図 検出遺構配置図(飛鳥～中世 1/400)  
(掘立柱建物の復原は案)

を実施した結果、弥生時代中期と考えられる溝S D 2018(幅約5m・深さ3m以上)であることが判明した。この溝が埋没していく過程で弥生時代後期から平安時代後期にわたり溝の掘削、埋没が繰り返されていたことが判明した。

微高地上ではおおむね2面の遺構面を確認した。上層は飛鳥時代～中世、下層は弥生時代～古墳時代に属する遺構である。ただし、下層として確認した遺構中にも、上層で検出されなかった遺構が存在することをあらかじめ断っておきたい。以下、それぞれの時期に分けて概観する。

### (1) 飛鳥時代～中世

調査地北側の微高地上で掘立柱建物跡12棟以上、谷部分で溝5条などを検出した。また、主要な建物についても概観しておきたい。掘立柱建物跡群については、遺構と遺物関係の検証を実施している最中であるが、大型掘立柱建物跡が含まれる点が注意される。

**掘立柱建物跡 S B 2001** 東西2間(5.5m)×南北5間(7.5m)以上の大型掘立柱建物跡である。柱穴内出土遺物から、

奈良時代に属する。

掘立柱建物跡 S B 2003 南北3間(8m)×東西1間(2.1m)以上を測る。主軸の平行関係から S B 2001と同時期と考える。

掘立柱建物跡 S B 2002 東西2間(4.2m)×南北2間(6.3m)を測る。主柱穴を切る土坑内から、木箱を納めその上に八稜鏡をのせた遺構が確認された。地鎮のための祭祀遺構と考える。平安時代の掘立柱建物跡である。

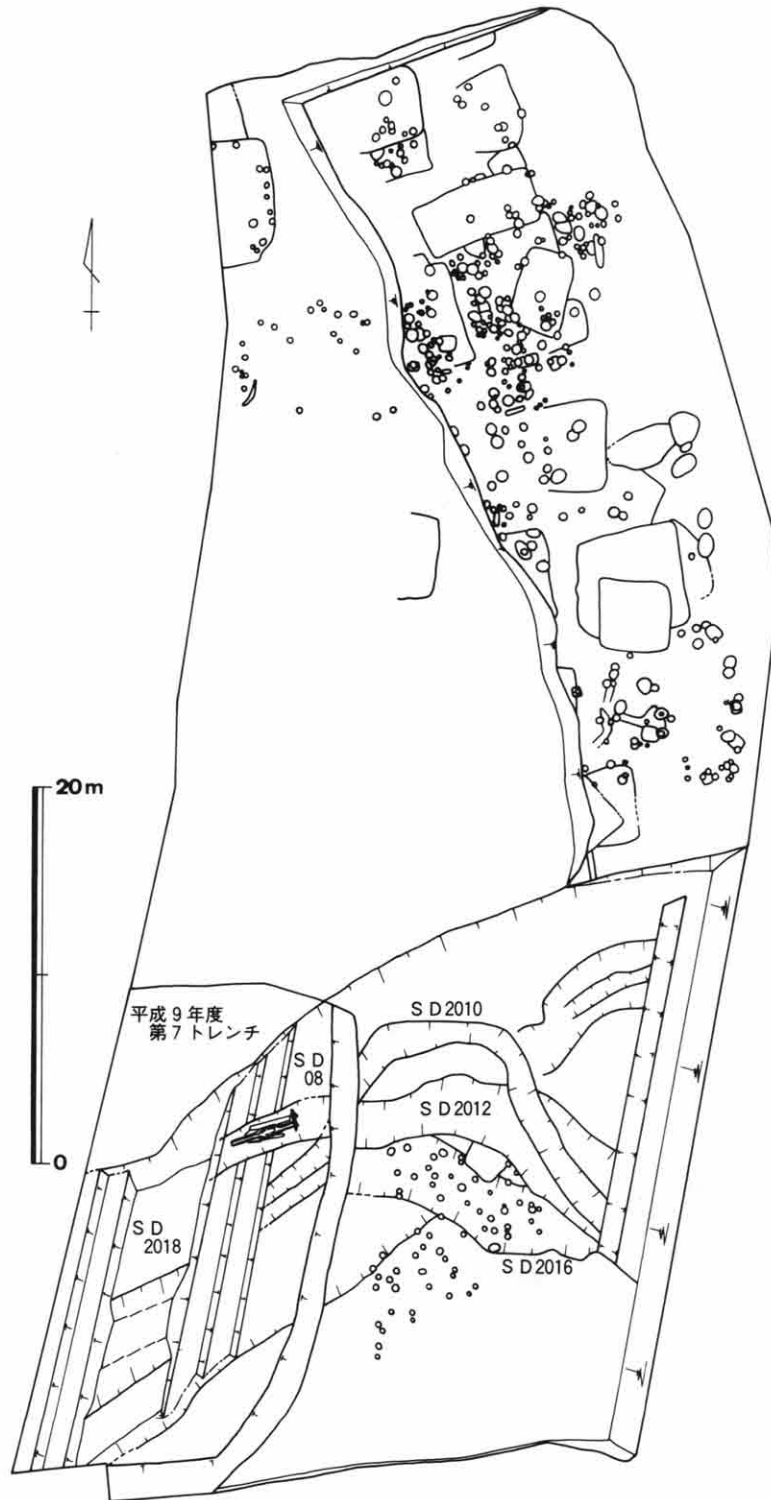
溝はいずれも谷部分を東から西へ流れるように掘削され、溝 S D 2001からは墨書土器、刀形木製品が、溝 S D 2003からは荷札木簡が出土した。

出土遺物には、土師器・須恵器をはじめとする土器群の他、鏡(八稜鏡)・墨書土器・木簡・円面硯・風字硯・銅製鉸具・銅製分銅・瓦・鉄滓・青磁・白磁など特殊な遺物が注目される。

## (2) 弥生時代～古墳時代

谷状地形部分から溝7条、北側微高地上から竪穴式住居跡・テラス状遺構21基・土坑などを検出した。

溝 S D 2010 谷部分を南東から大きく屈曲し、南西へ向かって流れる溝である。2か所の浄水施設が設けられている。また屈曲部に当たる部分は掘立柱建物の敷居や柱材を転用した護岸施設が施されていた。この溝には最終埋没時に多量の木製品が流入しており、鋤・鍬をはじめとする農



第3図 検出遺構配置図(弥生～古墳時代 1/400)

工具および農工具の未製品、刀・船等の形代、建築部材などが出土した。土器は土師器とともに若干の須恵器が相伴している。一部ではあるが出土遺物の実測図を提示しておいた(第5図)。

溝SD2012 昨年度調査した溝SD08の上流部に相当すると考えている。ただし、昨年度検出した導水施設と同時に機能していたかどうかは明確ではない。浄水施設を1か所検出した。

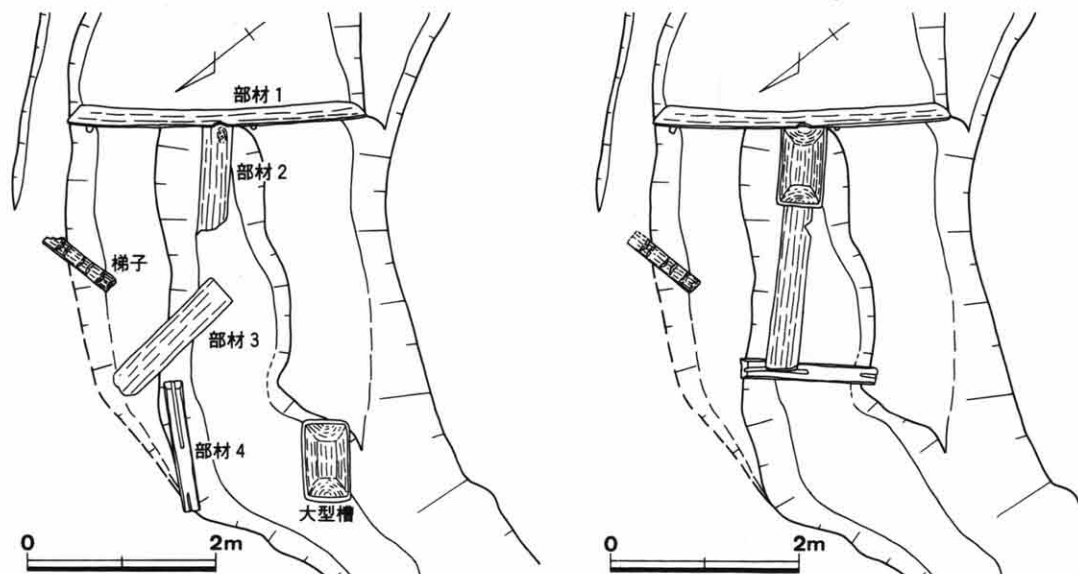
浄水施設は、板材(部材1)を溝に直交させ水をせき止めるための施設と、それに直交する板材(部材2)を下部に設けることにより構成されている。部材1は上辺中央部分に切り込みを設け、この部分から水が流れ落ちるように加工されている。また、部材2にはここから流れ落ちた水が当たることでうがたれたと見られる窪みが確認された。部材2の下部には高さを調整するために鋤未製品がはめ込まれ、北岸には梯子が据え付けられた状況で検出された。この他にも、周辺からは二次的な移動を受けたとみれる部材が複数出土しており、出土状況を元に復原を行いたい。

まず、部材3であるが、これは部材2との接合関係が明確である。この部材もまた上方にくり込みを持つ板材であり、SD2012にはさらに古い段階で浄水施設が設けられていたものと考えられる。この部材2は、溝底面より約10cm浮いており、この状態で固定することは困難であると判断される。部材4は建築部材を転用したものであるが、これは特に固定されたものではなく、やはり二次的な移動を受けている。水流の方向を考えた場合、この部材は北側の一点を支点として南側に力の掛かった結果、移動したと思われる、本来は溝に対し直交する状況であったと考える。

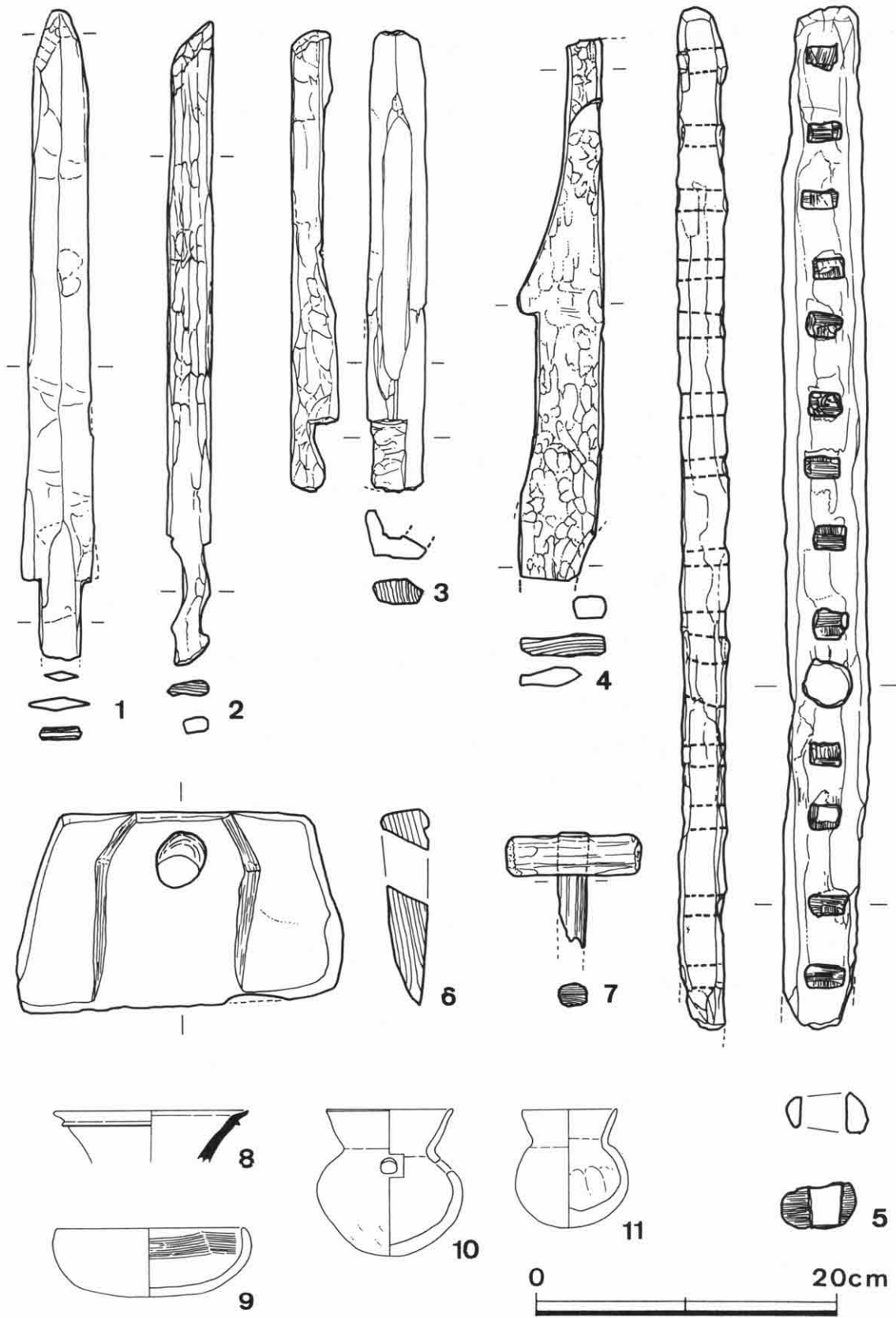
以上のように各部材の原位置を検討した結果、部材4の上に部材2・3の西端が乗り、橋状の施設として復元することができる。大型槽については、これが水を溜めるための容器であったと考えた場合、部材1から流れ落ちる水を受ける場所に設置されたとみるのが妥当であろう。

このように、形態こそ昨年度検出された導水施設とは異なるものの、機能的には、流水をせき止めて貯水・沈澱を行い、上澄みを槽に貯めるという点ではSD2012の浄水施設も同様である。

溝SD2012浄水施設近辺では出土遺物が少なく、わずかな土器群のほか、剣刀装具・円盤状木製品などの木製品が若干出土したのみである。また、桃の種子が比較的多く出土している。遺物



第4図 SD2012浄水施設検出状況(左)・同復原図(右)



第5図 出土遺物実測図  
(1・2.包含層 3～11. S D2010)

には畿内布留式併行期の土器が含まれ、古墳時代前期に機能していた溝と見ることができる。

溝S D 2016 S D 2012に切られる溝である。浄水施設を1か所検出した。S D 2012の浄水施設とは異なり、水を受ける部分には特別な施設が設けられておらず、実用的な側面が高いものと思われる。おおむね弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に該当するものとする。

北側微高地上においては多数の竪穴状遺構・テラス状遺構・竪穴式住居跡が複雑に切り合った状況で検出された。現在、遺物整理を実施している途中のため個別の時期については明らかにしていないが、現地で確認した限り、遺物の大部分は古墳時代後期に属するものであり、弥生時代後期ないしは古墳時代前期に属するものは極めて稀少である。このような状況から、この微高地上が本格的な居住地として使用されるのは古墳時代後期になってからと考える。

### 3. 小結

以上、簡単に浅後谷南遺跡の調査成果について記してきた。

まず、注目されるのは飛鳥時代～平安時代にかけての掘立柱建物跡群とそれに伴う遺物である。遺物中には分銅・硯(円面硯・風字硯)・墨書土器・鉸具・八稜鏡・瓦など一般集落で出土しないものが目に付く。また、輸入陶磁器類についても相当量の出土をみている。以上の点から、浅後谷南遺跡は官衙的性格をもつ遺跡であったと考える。

古墳時代では、中期のS D 2010出土の木製品、前期のS D 2012の浄水施設が注目される。

S D 2010出土の木製品中には舟形・武器形などの祭具が多く見られるほか、高床建物の建築部材、農工具未製品が相当量含まれる。丹後地域では古墳時代前期の木製品を豊富に出土した峰山町古殿遺跡が知られているが、本調査例は中期の木製品の实体を知る好資料といえる。

S D 2012で検出した浄水施設は、構造的には比較的簡素なものであるが、先に示した復原案のように橋状の付随施設をもつ特殊なものである。昨年度検出された導水施設を含め、首長による水の祭祀に関連する遺構と見することも可能であるが、飲料水などの浄水を得るという実用的な側面も考慮しておく必要がある。この点については今後の検討課題としておきたい。また、北側微高地上に古墳時代前期の遺物・遺構がほとんど見受けられないことから、浄水施設自体は集落から離れたところ、あるいは縁辺部に相当する位置にあるものとする。

また、各遺構からは多くの土器資料を得ることができた。一括性の保証される土器群は少ないものの、遺構の切り合い関係から相対的な編年の見通しを立てることが可能と考える。この点に関しては、今後の整理作業を行っていく上で明らかにしたい。

(くろつぼ・かずき＝当センター調査第2課調査第1係主査調査員)

(いしざき・よしひさ＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 黒坪一樹「浅後谷南遺跡出土の導水施設について」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

黒坪一樹「(4)浅後谷南遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第83冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

# 下植野南遺跡(下層)の調査

竹下 士郎

## 1. はじめに

下植野南遺跡は、淀川に注ぐ小泉川左岸の沖積低地に位置する複合遺跡で、これまでに縄文時代から中・近世に至るまでの、連綿とした人々の営みの跡が確認されてきている。

今回の発掘調査は、中央自動車道西宮線(名神高速道路)大山崎ジャンクションの建設に先立ち、日本道路公団の依頼を受けて実施したものである。昨年度末より調査を開始し、今後も調査地点を変えながら、継続的に調査が進められる予定である。

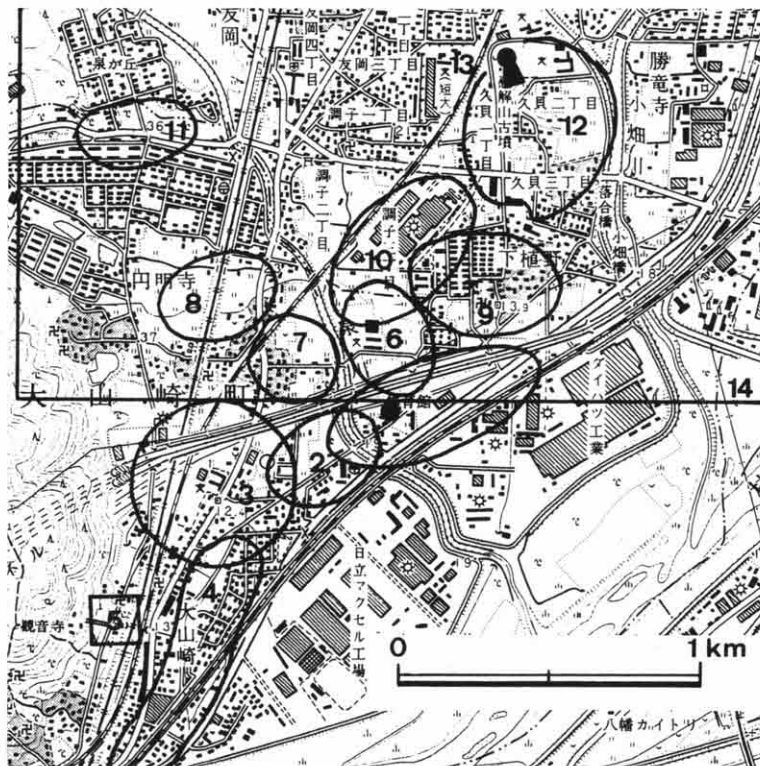
今回の調査地点では、現地表面から約2.5mの深さで、上層の遺構面を検出している。ここでは、古墳時代後期(およそ6世紀前半)頃のものと考えられる竪穴式住居跡や、掘立柱建物跡などを多数検出した。このうち竪穴式住居跡には、良好に竈の跡を残しているものもあり、さらに埋め土の中からは、非常に多くの土器や滑石製白玉なども出土しており、当地における当時の人々の暮らしぶりを知る貴重な資料を得ることができた(『京都府埋蔵文化財情報』第70号に略報を掲載)。

その後、さらに下層の調査を行っており、これまでに、古墳時代前期のものと考えられる竪穴式住居跡や井戸跡、さらに弥生時代中期のものと考えられる方形周溝墓群などを検出している。ここでは下層の調査の成果について、簡単にまとめておきたい。

なお平成11年度に、上層・下層を含めた調査概要の報告を行う予定である。

## 2. 調査の概要

上層の遺構面から約20～40cmほど掘り下げると、調査地の西側半分には、小泉



第1図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 下植野南遺跡(調査地) 2. 算用田遺跡 3. 百々遺跡 4. 山崎津跡  
5. 山崎廃寺跡 6. 松田遺跡 7. 金蔵遺跡 8. 久保川遺跡 9. 宮脇遺跡  
10. 裕遺跡 11. 脇山遺跡 12. 南栗ヶ塚遺跡 13. 恵解山古墳 14. 長岡京跡

川の旧流路跡と考えられる砂礫や小礫が厚く堆積していた。しかし、東半分では、暗黄褐色から暗茶褐色を呈する土層をベースとする、弥生時代中期～古墳時代前期の遺構面を検出することができた。

#### (1) 古墳時代前期の遺構

**竪穴式住居跡 S H171** 長辺約4.0m・短辺約3.5mで、やや隅丸の長方形を呈する住居跡で、検出面から床面までの深さは約15cmを測る。支柱穴は確認できなかったが、幅約20cm、床面からの深さ5cmの周壁溝を検出した。またこの住居跡の中央部では、炭を含む浅い土坑を検出しており、これは炉跡であると考えられる。

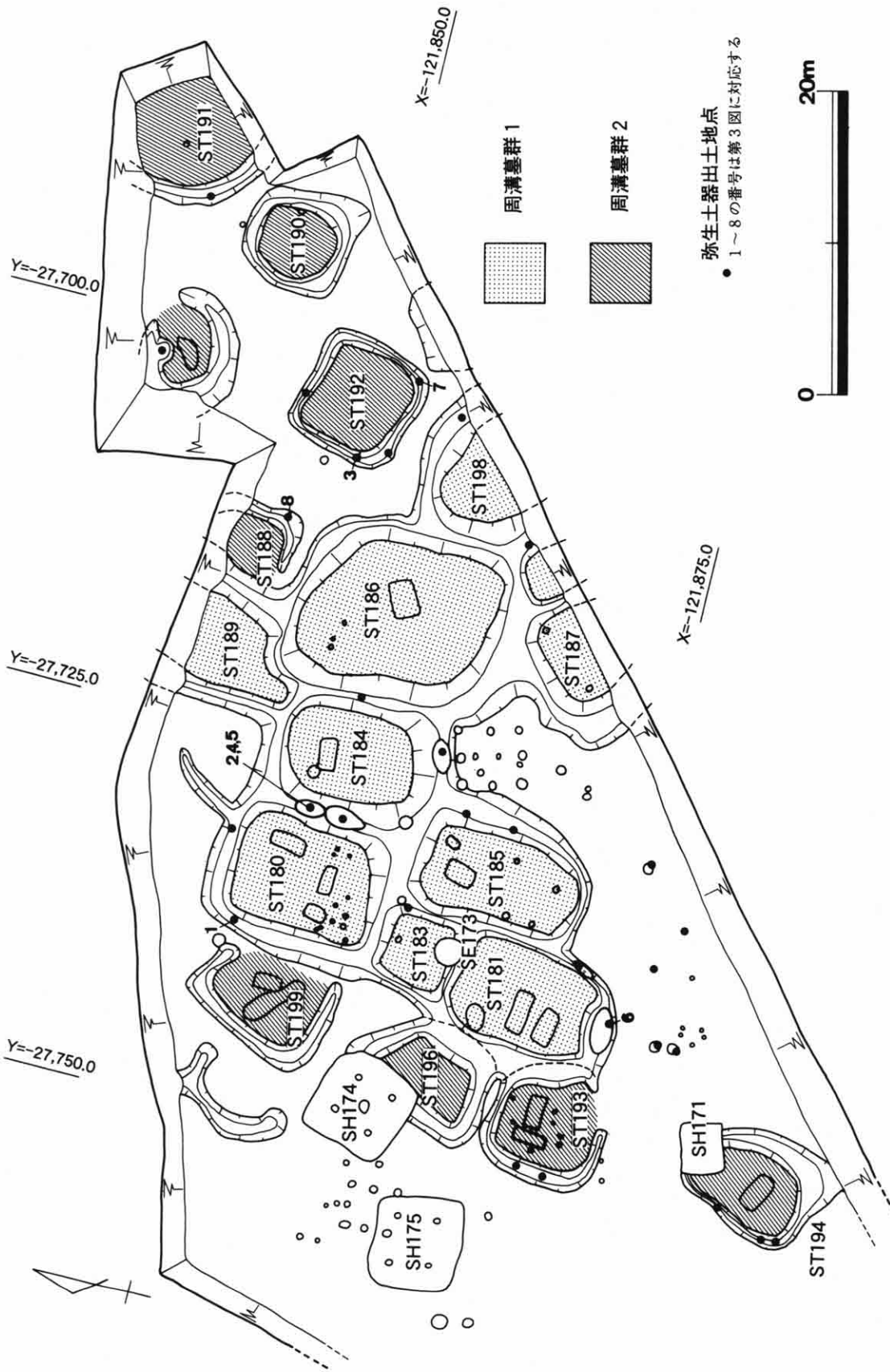
**竪穴式住居跡 S H174** 一辺が約6.0mの方形の住居跡で、検出面から床面まで約50cmを測る。床面近くでは、大量の土器と共に多くの炭が出土した。また埋め土は、数種類の色合いや質の違う土が、この住居跡の南壁部から斜めに堆積していたことから、この住居は火事で焼け落ちた後、当時の人々が人為的に埋めたものと推測される。4本の柱穴のほか、ほぼ全周で周壁溝を検出した。また、この住居跡でも中央部で炉跡を検出した。

**竪穴式住居跡 S H175 a・b** 当初一辺が約6.0mの方形の輪郭を検出したことから、一棟の住居跡と推定して掘削作業に取りかかった。その結果、ほぼ三辺で周壁溝を確認し、4本の支柱穴を検出した(S H175 a)。さらにこの住居跡の床面で、下層にS H175 aよりもわずかに小さな住居跡が存在することが確認できた(S H175 b)。S H175 bでも周壁溝が確認されたが、柱穴は検出しなかった。おそらく柱穴は、上層・下層の住居で共有されたものと考えられる。埋め土の堆積状況から、S H175 bの柱穴を共有しながらも、規模を拡張してS H175 aに建て替えたものであろう。この住居跡ではほとんど遺物が出土していないが、検出面のレベルや埋め土の状況などから、S H174と同世代のものと考えている。

**井戸 S E173** 検出面での直径は約1.8mで、最深部までの深さは約1.5mを測る、素掘りの井戸跡である。埋め土は、暗茶灰褐色を呈する粘土が中心で、下層は砂利・粗砂混じりとなる。この埋め土の中からは、ほぼ完形に復元できるものや、完形に近い土器が多く出土した。下層から出土した土器の特徴から、この井戸跡は、上記した竪穴式住居跡などとほぼ同時代に機能したものと推定される。

#### (2) 弥生時代中期の遺構

大小あわせて20基あまりの方形周溝墓を検出した。これらの方形周溝墓は、大山崎町体育館建設の際の調査の例などともあわせると、調査地の東側にも大きく広がる様相で、この付近には相当広範囲に墓域が広がっていたものと予想される。また、周溝外で出土している弥生土器の分布状況から、S T181の南側にも、今回検出できなかった周溝墓があった可能性がある。検出した方形周溝墓は、周溝を共有して連結するもの(周溝墓群1)と、しないもの(周溝墓群2)が混在していたが、およそ周溝墓群1の周辺部に周溝墓群2が位置しているようである。今後詳しい検討を加える予定であるが、周溝墓群1と周溝墓群2は、それぞれの周溝内出土の土器の中で、一番古いと考えられるものが、いずれも第Ⅱ様式の特徴をもつものであるところから、ほぼ同時期に



第2図 調査地平面図(1/400)



存在したものと考えられる。つまり、周溝墓群1と周溝墓群2の違いは、時間差の違いを示すものではなく、それぞれの被葬者の社会的性格や身分・地位の違いなどを示すものではないかと考えられる。

**方形周溝墓群1** 検出面での幅約1.5~2.0m・深さ約0.5~1.0mの溝をそれぞれ共有しあい、連結した状態の方形周溝墓である。S T183のように若干小さいものもあるが、おおむね溝中心間で長辺10~14m・短辺8~10mを測るものである。各辺の周溝内ほぼ中央部の底からは、2~3個体分の土器が出土している。またそれらの中には、溝内の浅い土坑の中に土器の口縁部を向かい合わせるように埋められているところもあり、これらは周溝内埋葬として利用されていた可能性が考えられる。周溝の埋め土は暗灰褐色から暗茶褐色を呈する粘質土が主体で、基盤とする土層と同質化しており、各溝の切り合い関係はあまり明確ではないが、周溝内から出土した土器から、この周溝墓群1の中では、およそ西から東に向かって順に築造したものと考えている。

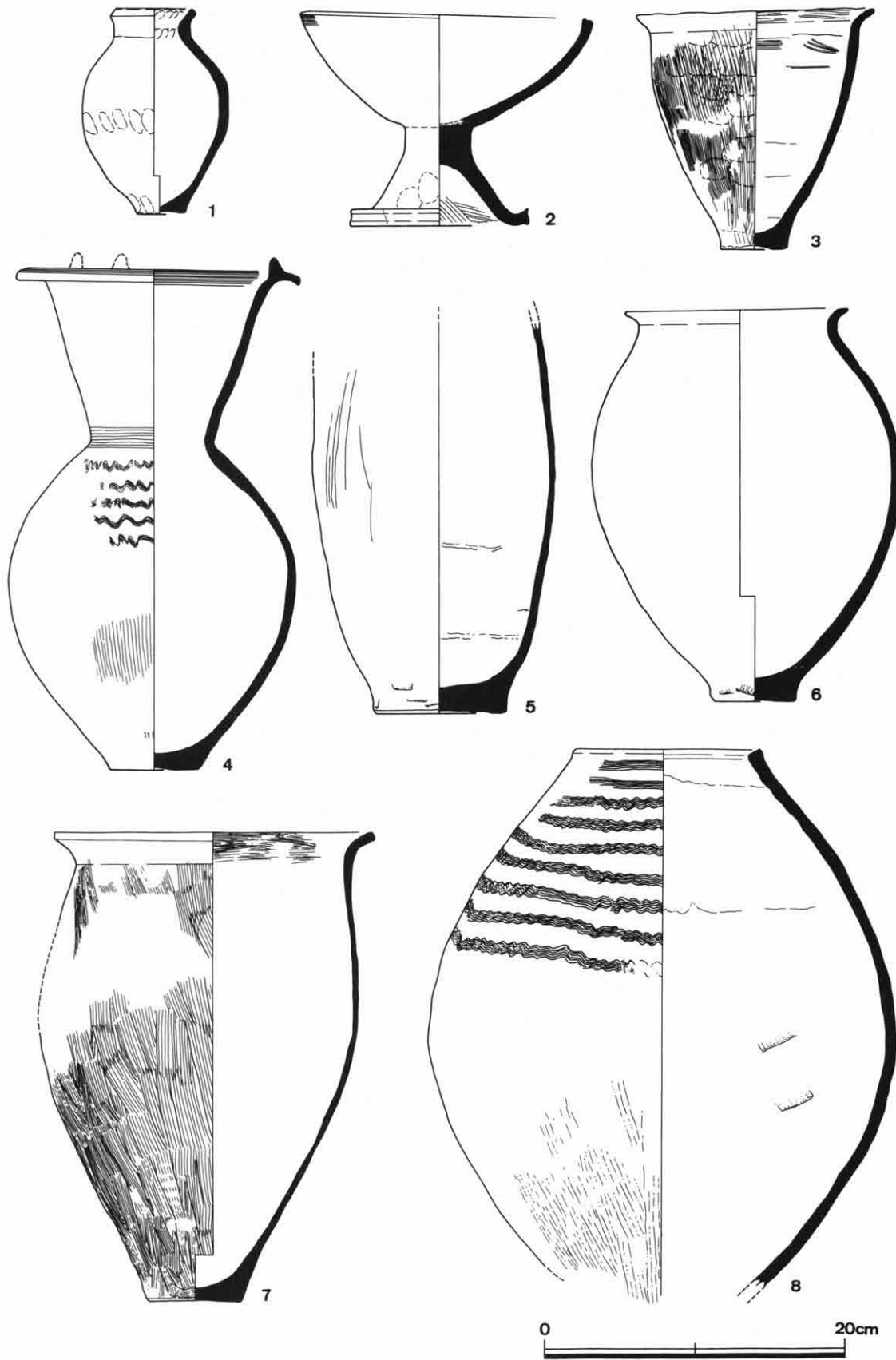
また墳丘上では、合計11基の主体部を検出した。それぞれの主体部は、おおむね長辺が約1.4~1.6m、短辺が0.5~0.6mを測るもので、主軸を東西方向にとるものと、南北方向にとるものがある。また、S T180・181の主体部は、検出時の状況や、埋め土の断面観察から、木棺直葬であったと推定している。

**方形周溝墓群2** これらは周溝を共有しておらず、前述した周溝墓群とは埋め土の状況も若干異なるものである。周溝墓群1とくらべると、大きさも一辺が約5.0~7.5m程と小さくなり、それぞれの周溝も、幅は0.4~1.8mとやや狭まり、深さも0.3~0.7mと少し浅くなる。また、ほぼ方形に周溝をめぐるものや、ややいびつな楕円に近い形に周溝をめぐるもの、陸橋部を持つものと持たないものなど、周溝の形状が異なることなどから、この周溝墓群2の中には、またいくつかのグループがあったことが推定される。このうちS T194では、主体部と推定される長方形の土坑を検出した。周溝内から出土した土器から、この周溝墓群の中では、S T192が一番古いものと考えている。

### (3) 出土遺物

今回提示したものは、全て方形周溝墓の周溝内から出土した弥生土器である。(各出土地点は、調査地平面図に番号を明示している)。1は、器高13.6cm・口径5.0cmを測る小型の壺で、完形で出土したものである。2は高坏で、脚部など丁寧に仕上げられている。器高14.2cm・口径19.3cmを測る。3は器高16.0cmの鉢で、口縁部は外反している。4は口縁部内面に、コブ状の突起を有するものである。このコブは、失われている部分もあるが、ほぼ等間隔に合計3個あったものと思われる。体部上半には波状文が施される。6の壺は、器高26.1cmを測るものである。7は外面タテハケ、口縁部内面にヨコハケの調整がなされる。8は無頸壺で、底部が欠損している。体部上半には2条の櫛描直線文と7条の波状文が施されており、口縁部はわずかに肥厚する傾向が見られる。

5は、今回出土した他の土器とは明らかにその形態が異なっており、特筆すべきものであろう。底部径8.5cm・残存高25.9cmを測り、底部外面には、木の葉圧痕が認められる。底部からやや開



第3図 出土遺物実測図

いて立ち上がる体部は、円筒状で長胴気味である。また、体部外面には不明瞭であるが、ヘラ状の工具で調整を施した痕跡が見られる。口縁部は失われており、その特徴は不明であるが、おそらく他の土器と合わせ口にし、棺として利用するために、意図的に打ち欠いたものであろう。現在のところ、この形態的な特徴などから、この土器はいわゆる「擬朝鮮系無文土器<sup>(注1)</sup>」として把握してもよいのではないかと考えている。しかしながら、これまでに報告されている類例のなかでは、弥生時代前期の土器と共伴している例が多く、今回のように中期の土器と共伴している例の有無も含めて、今後さらに検討を加えなければならない。

現在、出土遺物の整理作業を継続しているところであり、詳しくは概要報告書の中で述べることとするが、これらの土器は、およそ第Ⅱ様式から第Ⅲ様式前半の特徴を示すものであり、今回示すことのできなかった、このほかの弥生土器についてもほぼ同様であると考えている。

この他、土器以外では、住居跡で鉄製品の小片や、主体部の埋め土から石鏃の破片と考えられるものが出土している。

### 3. まとめ

今回の調査の結果から、弥生時代中期前半になると、この地は比較的広い範囲が墓域として利用されはじめることが明らかとなった。また、この方形周溝墓群に葬られた人々は、ひとつの有力者グループだけでなく、いくつかのグループに分けられるようである。さらにこの中には、何らかのかたちで朝鮮半島との関わりを持つ人たちがいたことも推定される。

古墳時代前期の頃になると、この地は墓域から集落域に変化するようである。これまでに下植野南遺跡の中で、この時代の竪穴式住居跡などが検出された例は少なく、今回の調査で複数の住居跡や井戸跡が検出されたことから、この周辺がこの時代の集落の中心であったと考えてもよいのではないだろうか。

古墳時代後期以降は、大山崎町体育館建設に先立つ調査や、名神高速道路の拡幅に伴う調査でも多くの住居跡やそのほかの遺構が検出されているところから、下植野南遺跡は非常に規模の大きな集落となっていたようである。

(たけした・しろう＝当センター調査第2課調査第4係主査調査員)

注1 片岡宏二「日本出土の朝鮮系無文土器」(『古代朝鮮と日本』) 1990

## 平成10年度発掘調査略報

## 16. 奈具岡遺跡第9次

所在地 竹野郡弥栄町溝谷  
 調査期間 平成10年8月18日～11月13日  
 調査面積 1,260m<sup>2</sup>

はじめに 今回の発掘調査は、主要地方道網野岩滝線の建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。奈具岡遺跡の調査は、これまでに8回行われており、特に第4・7・8次調査では、弥生時代中期の玉作り工房跡やそれに関連する遺物が多数見つかった。今回の調査地は、これらの調査地の西側の丘陵上に位置する。

調査の概要 今回の調査では、竪穴式住居跡のほか、溝・柱穴などが多数検出された。これらの多くは、弥生時代後期から古墳時代中期にかけてのものである。

竪穴式住居跡は4基検出され、そのうち、3基は弥生時代後期の住居跡で、いずれも一辺3m程度の小型の住居跡である。出土遺物はそれほど多くないが、炭化米が出土した住居跡があり、特筆される。残る1基は、古墳時代中期の住居跡で、一辺が5.3mを測る。遺物は、多量の土師器のみで須恵器を含んでいなかった。また、白玉1点と炭化米が出土した。

このほかにも、多数の溝跡や柱穴跡を検出しており、少なくとも3棟前後の掘立柱建物跡と2基前後の柵を復原できる。掘立柱建物跡や柵の詳細な時期は不明である。

調査地の南西部には埋没した谷地形が存在し、現地表下約1.3mに遺物包含層(弥生時代後期～古墳時代中期)を確認した。また、現地表下約2.8mで谷地形の底を確認し、時期不明の落とし穴状遺構2基を検出した。



調査地位置図(1/50,000)

まとめ 今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての竪穴式住居跡が検出されたが、玉作り作業を行っていた痕跡は皆無であった。弥生時代後期以降、奈具岡遺跡では玉作り作業などは行われていなかったと考えられる。

また、古墳時代中期の竪穴式住居跡からは須恵器が出土しておらず、奈具岡遺跡の集落は古墳時代中期中頃を境に廃絶したと考えられる。

(筒井崇史)

## 17. 左坂古墳群 D・E支群

所在地 中郡大宮町周枳  
調査期間 平成10年7月7日～11月12日  
調査面積 約1,200m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、国営農地丹後東部地区周枳団地造成事業に伴うもので、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。左坂古墳群は、丹後半島中央部を南北に貫流する竹野川の、東岸に連なる低丘陵上に位置している。この丘陵の主尾根線上や、そこからのびる小尾根上には、古墳が多数分布している。古墳だけでなく、弥生時代の墳丘墓や飛鳥・奈良時代の横穴墓もある。また、中世の遺跡としては、幾坂経塚や幾坂城跡もあり、各時代の遺跡の密集地域と言える。

調査概要 今回、発掘調査を行った左坂古墳群D・E支群は、尾根の主脈から北方向にのびる小尾根上に位置する。D支群で9基、E支群で4基の、計13基の古墳を調査した。いずれも、木棺直葬墳である。主体部の主軸方向は、ほぼ東西方向である。

### ①D支群

南から北に向かって、3～7・29・8～10号墳の順に並ぶ。ほとんどが尾根稜線を削りだした台状墓状に築造されているが、9号墳は盛土を有している。主な内容は以下のとおりである。

3号墳 棺内から瑪瑙製勾玉・碧玉製管玉・ガラス製小玉などが出土した。棺には赤色顔料(ベンガラ?)が塗られている。

5号墳 主体部は3基で、第1主体部からは、刀・鎌などの鉄製品が、第2・3主体部上からは須恵器蓋杯・高杯などが出土した。

6号墳 主体部は、流失したためか、検出できなかった。なお、5号墳との境の溝から埋葬主体部を検出した。この主体部を設ける時に、5号墳北辺が削りとられている。副葬品はない。棺には赤色顔料が塗られている。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

8号墳 主体部は1基で、棺の底部は丸みをもっており、削り抜き式の木棺(舟形木棺?)であった可能性がある。棺には、赤色顔料が塗られている。棺内の東側からガラス製小玉が多数出土した。なお、29号墳との境の溝の中に2基の主体部を設ける。その内の、1基の主体部の棺には赤色顔料が塗られている。

9号墳 今回調査したD支群の古墳の中では、最も大きい。8号墳との境の溝も深く広く掘られている。隅丸形状の墳形である。墳頂南寄りに、主体部を設ける。



第2図 調査地全景(下が北)

の1基から碧玉製管玉・ガラス製小玉が出土した。

8号墳 主体部は3基で、第1主体部は、棺に赤色顔料が塗られている。削り抜き式の木棺とみられる。棺内中央付近からガラス製小玉が出土した。第2主体部は、副葬品はない。第3主体部からは、刀・鏃などの鉄製品が出土した。

まとめ 今回調査した古墳の築造時期は、出土した須恵器からみて、5世紀末から6世紀前半頃と考えられる。この時期は、この支群における古墳築造の最盛期にあたる。5世紀末頃に築造された古墳としては、D8・9号墳、6世紀前半頃のものには、D5号墳・E7号墳がある。

主体部は、いずれも木棺直葬であるが、その大きさや位置、棺の形態や赤色顔料の塗布の有無、副葬品の有無、副葬品の内容など、かなりバラエティーに富んでいる。このような差が何によるものかは明確ではないが、丹後の古墳時代中期末から後期前半にかけての埋葬形態の多様性を物語る、興味深い資料と考えられる。

(引原茂治)

主体部は1基で、副葬品はない。なお、この古墳の表土を除去した時点で、墳頂中央東側から須恵器甕・鉄製刀子などが出土しており、中央部にもう1基の主体部があった可能性がある。

#### ②E支群

南から北に向かって、5～8号墳の順に並ぶ。尾根の稜線を削り出して台状墓状の墳丘を築造しているが、盛土をもつものもある。主な内容は、以下のとおりである。

7号墳 主体部は2基で、第1主体部では、棺の東側小口にあたる場所から、須恵器蓋杯が出土した。第2主体部は、棺に赤色顔料が塗られており、副葬品はない。なお、6号墳との区画溝の中に主体部を2基設ける。その内

## 18. おお 太田遺跡第8次調査

所在地 亀岡市葺田野町字太田小字森7・19

調査期間 平成10年10月26日～平成11年2月8日

調査面積 約1,200m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、府営ほ場整備事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。太田遺跡は、弥生時代から中世までの複合遺跡である。昭和57年度に国道9号バイパス建設に伴って実施された調査で、弥生時代前期～中期にかけての直径約160mの環濠集落が発見され、著名な遺跡とされている。また、西側には鹿谷遺跡が広がり、平成3・4年度の調査で、古墳時代の住居跡や鎌倉時代の建物跡などが見つかっている。

調査概要 今回の調査地は、太田遺跡の西端で、西は鹿谷遺跡に接し、行者山南裾部に広がる微高地上である。調査の結果、古墳時代(6世紀前半)の竪穴式住居跡4基、奈良時代(8世紀中頃)の掘立柱建物跡7棟と井戸、鎌倉時代(12世紀後半)の柱穴群・溝・井戸などを検出した。

竪穴式住居跡群については、非常に残りの悪いものであった。これらについては、西方に位置する、古墳時代の住居跡を確認している鹿谷遺跡の東端が今回の調査地まで広がっていたものと考えられる。北方の丘陵斜面には、鹿谷古墳群や鹿谷池田古墳群が広がっており、これら古墳群と関連する集落跡と考えられる。掘立柱建物跡群については、3方向の主軸方向をもつ建物跡を確認した。その一部は隣接地にさらに広がる。井戸を囲む形で建物は見付き、最も大きな規模



調査地位置図

の建物跡は、4間×5間であった。柱穴の掘り形は50～90cmとかなり大きく、庇を持つ建物もある。これらのことから、現在の葺田野町一帯あるいはそれ以上の範囲を掌握していた豪族の居館跡であったと考えられる。また、建物跡と同時期と思われる遺構内から出土した土師器杯は、内面に暗文を施すもので、胎土も非常に緻密であった。このような遺物は、この付近では国府跡と推定される千代川遺跡から出土している。

鎌倉時代の遺構は、非常に残りが悪く、素掘りの井戸1基以外に顕著な遺構は無かった。したがって、この付近は、後世にかなり削平を受けたものの、古墳時代・奈良時代の遺構がさらに広がると思われる。

(岡崎研一)

## 19. <sup>あまるべ</sup>余部遺跡第5次調査

所在地 亀岡市余部町大塚

調査期間 平成10年9月4日～11月27日

調査面積 約750m<sup>2</sup>

はじめに 本調査は、広域幹線アクセス街路整備事業に先立ち、京都府亀岡土木事務所の依頼を受けて実施した。遺跡は、亀岡盆地の中央部、大堰川西岸の河岸段丘上に位置し、東西約900m・南北約1kmにわたって広がると推定される大規模な複合集落遺跡である。第5次調査にあたる今回の調査地は、遺跡の北部にあり、京都府亀岡市余部町大塚に所在する。余部遺跡は、昭和40年に遺跡中央部での立会調査以来、昨年度は、第2～4次の本格的な調査が相次いで行われ、遺跡の概要が明らかになりつつある。亀岡市教育委員会が行った第4次調査では、遺跡の中央部を調査し、弥生時代中期中葉～後半の11棟以上の竪穴式住居跡群を検出した。また、当調査研究センターによる遺跡北部での第2次調査では、弥生時代中期後半頃の方形周溝墓群や、中期古墳、古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡群等を検出している。

**調査概要** 調査は、第2次調査地の西側に、83×9mの規模のトレンチを設定して進めた。今回の調査では、主に弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺構を検出した。トレンチ中央から東側では、弥生時代中期と推定される溝3条・方形周溝墓4基・弥生時代後期の竪穴式住居跡1基・古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡5基、さらに中世以降の素掘溝3条を検出した。またトレンチの西側では、段丘の西端のラインを確認しており、遺構は段丘上に密に分布していることが明らかになった。

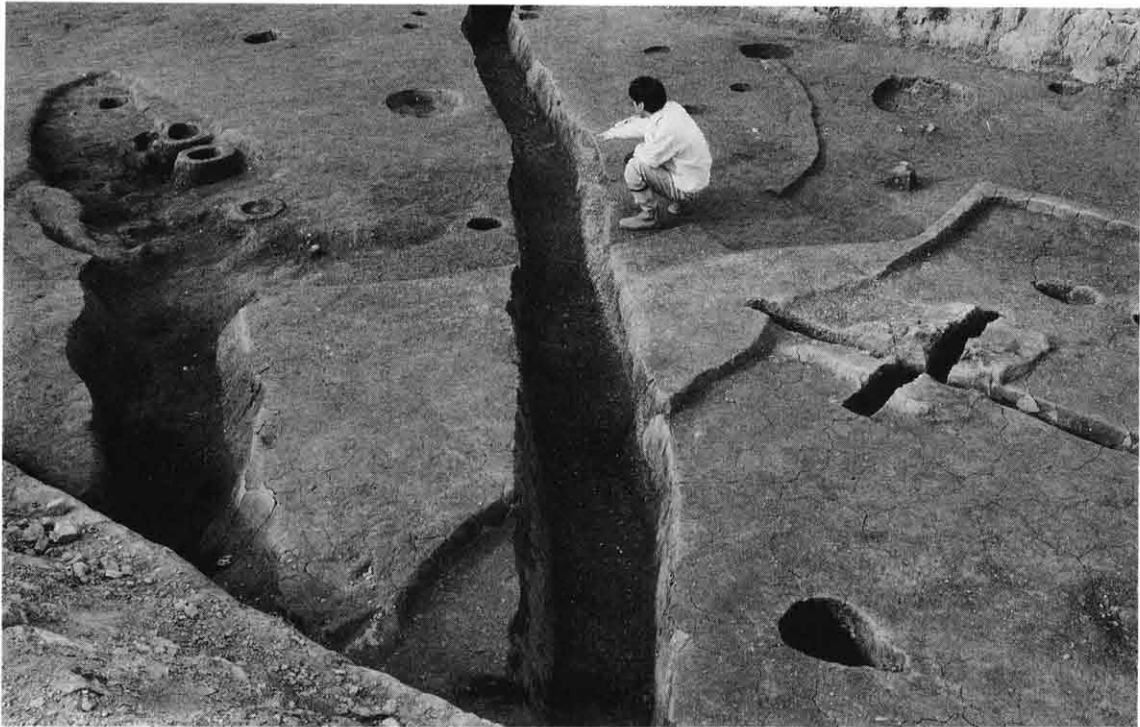
### ①弥生時代の遺構

溝513は、トレンチ西側で検出したもので、南東から北西に流れる流路で、約11mにわたって検出した。検出面での幅は約0.7mであり、深さ0.5～0.7mを測る。溝断面は逆台形をなし、流路中央南寄りの溝の中層から陽物を模した可能性のある異形土製品が出土した。溝からは若干の弥生土器片が出土しているが、量的には乏しく、時期を細かく比定することができない。しかしながら、上層が後期後半の竪穴式住居跡に削平されていることや、埋土の色調から、おおよそ弥生時代中期と推定される。この溝は環濠とするには、やや規模が小さいが、環濠から集落外へ排水する機能を持つ可



第1図 調査地位置図  
1. 余部遺跡 2. 余部城





第2図 溝513完掘状況

能性があり、異形土製品の出土とともに溝の性格が問題となろう。方形周溝墓群は、いずれも一片約6～9mの規模をもち、比較的規模は小さい。周溝からは、わずかに弥生土器片を出土したのみだが、昨年度の調査地で、弥生時代中期の方形周溝墓が多く検出されていることから、同時期のものである可能性が高い。一方、竪穴式住居跡512は、径約6.4mの円形竪穴式住居跡で、出土した土器から弥生時代後期後半の構築と推定される。床面からは、赤色顔料の付着した敲石が出土している。これまで余部遺跡では、弥生時代後期の遺構や遺物は確認されておらず、この時期の遺構は初めての検出例である。

## ②古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては、5基の竪穴式住居跡を検出した。住居跡の時期は、5世紀中葉前半から5世紀後半にかけてのもので、第2次調査地から西にこの時期の集落が大きく広がることが判明した。集落のなかでも、最も古い時期の竪穴式住居跡502は、一辺約4.6mの竈付きの住居跡で、床面には黄灰褐色砂層と、黒褐色土の互層からなる厚さ約0.2mの貼り床が認められた。床面から、布留系の土器群や、滑石製の勾玉が出土しており、時期は出土土器から、5世紀中葉前半頃と推定される。

まとめ 今回の調査では、第2次調査に続き、弥生時代中期の墓域の範囲がさらに西に広がることや、古墳時代中期～後期の集落についても、同様に西に拡大することが判明した。またトレンチ西側では、段丘の傾斜変換線を確認したことで、集落の範囲と土地利用を考えるうえで、貴重な成果を得た。段丘面西側の弥生遺物包含層は、グライ化しており、おそらく水田域として利用されていたものであろう。

(野々口陽子)

## 20. <sup>なか かい どう</sup> 中海道遺跡第49次

所在地 向日市物集女町御所海道・中海道地内

調査期間 平成10年11月19日～平成11年1月25日

調査面積 約270m<sup>2</sup>

はじめに 中海道遺跡第49次調査は府道中山稻荷線工事に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。対象地は丘陵地の東側斜面に形成された段丘である。調査地の現状は道路となっている。

調査概要 第49次調査では7か所にトレンチを設定した。うち西側の3か所のトレンチはすでに削平を受けており、盛土を除去した段階で黄褐色粘質土(礫混)色の地山面が検出され、遺構は検出できなかった。東側の1～3トレンチで検出された遺構はピットや溝が中心で、弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代・中世の4時期のものである。

特に最も東の第1トレンチでは、古墳時代中期の竪穴式住居跡を1棟検出した。住居跡S H02は、長辺約4m・短辺約3mのやや不整形な長方形である。これは、検出面から深さ約40cmが残存していた。貼り床も比較的明瞭であったが周壁溝はなく、柱穴も1か所しか検出できなかった。おそらくは2本柱の建物になるものと考えられる。竈の類もこの住居跡には無かった。

また、同じトレンチでは溝S D01を検出した。この溝は当初自然流路であったと考えられ、溝の下層には粗い砂礫が堆積しており、遺物は全く出土しなかった。この自然流路が埋没する最終段階に暗褐～茶褐色粘質土が堆積し、その中に弥生時代後期の遺物が含まれていた。この溝は、第17次で検出されたS R16の延長に当たる。

まとめ 今回の調査地は方形区画をもつ建物が検出された第32次調査に比較的近い位置であったが、同時期の遺構は検出できなかった。古墳時代中期の竪穴式住居跡S H02は、隣接地の第42次調査で同時期のものが検出されており、周辺が集落域であったことが再確認できた。この時期の集落域の西端に位置するものと考えられる。今回の調査区では、ガスパイプ・水道管等によって攪乱・削平を受けていたが、周辺調査の成果を裏付ける内容となった。

(藤井 整)



調査地位置図(1/25,000)

## ながおかきょうあと うきょう 21. 長岡京跡右京第615次(7ANHIJ-6)

所在地 長岡京市今里蓮ヶ糸

調査期間 平成11年9月10日～平成11年12月17日

調査面積 約500m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、府道大山崎大枝線の拡幅工事に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は長岡京跡の北西部に位置し、新条坊では右京二条四坊二町(旧条坊では右京三条四坊四町)および西三坊大路に推定されている。また、縄文時代から中世にかけての複合遺跡と考えられる井ノ内遺跡の範囲内にあたる。調査の結果、長岡京に関連する遺構は検出されず、かわって弥生時代後期、古墳時代後期、中世の遺構・遺物を調査地全域で確認することができた。

**調査概要** 調査地は、京都西山山麓端の標高40mの低位段丘に位置している。地質は「大阪層群」よりなり、その上に段丘層・沖積層が堆積している。調査で検出された遺構は、中世の素掘溝・柱穴、古墳時代の竪穴式住居跡6基・掘立柱建物跡、弥生時代の溝状遺構がある。

素掘溝は、幅20～30cm・深さ10～20cmで水田および畑にともなうものである。東西方向の溝と南北溝は交差しているが、東西溝が新しく、一部近世に至るものがある。この溝群は3～4本が重複しており数回掘り直しが認められ、長い期間耕作が行われていたと思われる。溝の中からは瓦器の細片が多く出土した。

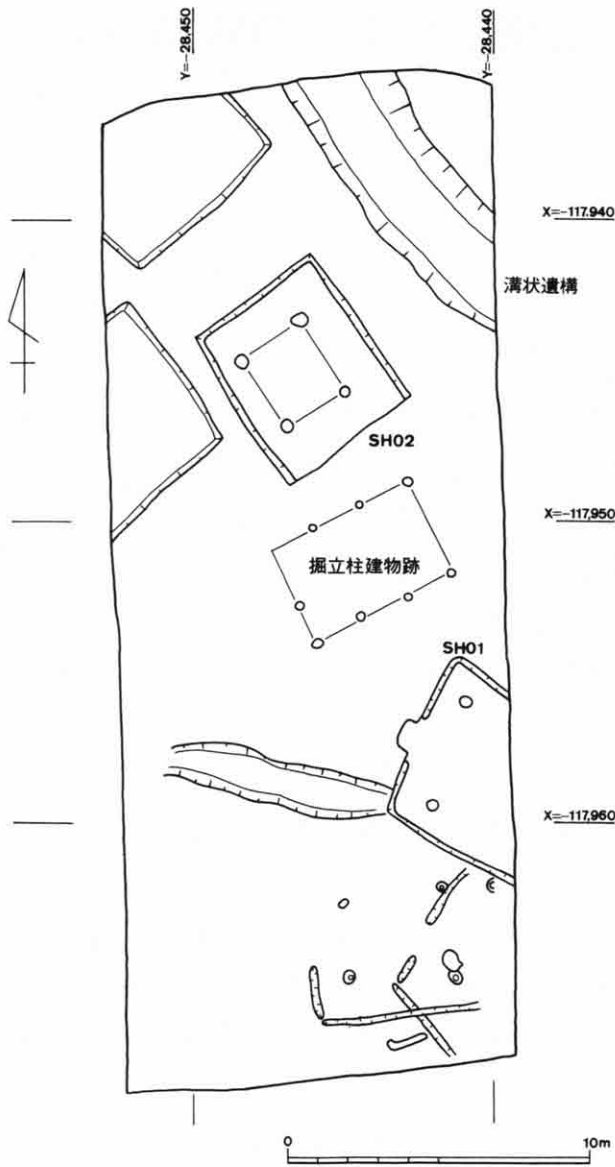
古墳時代の竪穴式住居跡は、3基ずつ南北2群に分かれ、南群では重複しており時期差が認め



第1図 調査地位置図(1/50,000)

られるが、おおむね後期に属する。竪穴式住居跡S H01は一辺5.8mで、北西辺中央に張り出した造り付けの竈をもつ。竈は1m前後で馬蹄形を呈し、灰のかき出し部、焚き口燃焼部、煙出し部などが明瞭に確認できた。竈本体は粘土質の土に砂を混ぜ合わせて固く積み上げられている。燃焼部には、土師質の高杯が逆さにして据え置かれ、支脚に用いられた。床面は固く締まっており、腐植土が斑点状に分布している。周壁溝は各辺に見られるが、竈付近で途切れていた。この住居跡は6世紀前半のものである。

竪穴式住居跡S H02は長辺5.7m・短辺



第2図 遺構実測図(1/250)

5.1mを測り、竈を持たない。床面は固く締まっており、腐植土・焼土痕が薄く堆積している。周壁溝は四辺に浅く巡るが、杭・板材の痕跡はない。主柱穴は4個あり、直径40～50cm、柱間寸法は3mを測る。

掘立柱建物跡は、調査地の中央で検出された梁行2間(3.5m)・桁行3間(4.9m)・柱間寸法は1.6mを測る。柱掘形は直径20cm前後の円形を呈し、小規模の建物である。

弥生時代後期の溝状遺構は、北西から南東方向にゆるやかな弧状を呈している。溝幅は、約3.2m・深さ0.9mを測り、溝の断面は底部から鋭く立ち上がる逆台形であることから、人為的に開削された遺構であると思われる。溝の堆積土は大きく3層に分かれ、上層には奈良時代の土師器・須恵器・土馬、中層には古墳時代の須恵器・土師器、下層には弥生時代後期の甕などが出土した。この遺構は、弥生時代後期から古墳時代を通じて奈良時代に至るまでの長期間、機能していたものと思

われる。恐らく、溝は長岡京の造営時期において西三坊大路路面の造作によって完全に埋没したものであろう。

まとめ 今回の調査について、簡単に各時代の様相を記述したい。

(1) 竪穴式住居跡群は、何回かの建て替え、共存が認められるが、その多くは6世紀前半に属するもので、井ノ内遺跡の範囲は南西側に広がることが分かった。

(2) 溝状遺構は、位置・規模・出土遺物などからみて、昭和54年度の京都府教育委員会の調査で見つかった「環濠」とされる溝の延長上のものである。しかし、環濠であるとは断言できないのが現状である。さらに北西もしくは北へ延びていることが想定され、今後の調査が期待される。

(竹井治雄)

## 22. <sup>なが おかきょうあと う きょう</sup>長岡京跡右京第620次(7ANKNA-2)

所在地 長岡京市長岡2丁目223番の3

調査期間 平成10年10月22日～平成11年1月22日

調査面積 約420m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、近畿財務局による住宅建設に先立つ事前調査として実施した。長岡京跡では、平城京型復原で右京五条三坊一町(右京五条三坊三町)にあたり、調査対象地の北辺では、四条大路の南側溝(五条条間小路南側溝)が想定される。

調査概要 発掘調査は、南北2か所に調査区を設定して行った。

### ①第1トレンチ

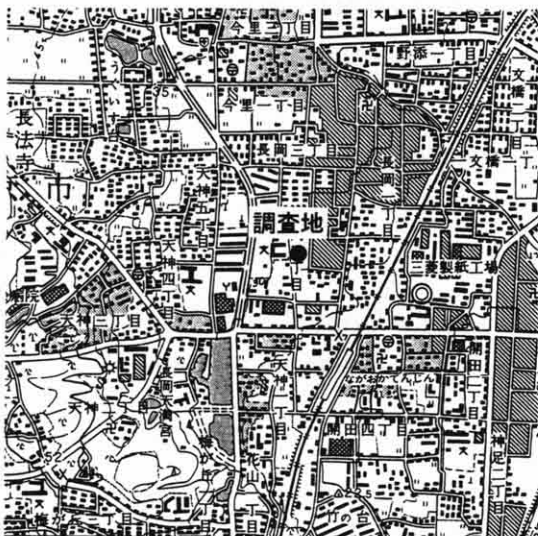
この調査区は、四条大路の南側溝の検出が想定される位置にあたる。調査の結果、3条の東西方向の溝を検出した。これらの溝のうち、長岡京期に機能していたと考えられる溝SD62010は、上層の埋め土から長岡京期と考えられる瓦や土器などが出土した。検出した位置関係は、これまでに検出された四条大路南側溝(五条条間小路の南側溝)より約6m南に位置している。

### ②第2トレンチ

第2トレンチは、五条三坊一町(五条三坊三町)の宅地にあたる。検出した遺構のうち長岡京期と考えられるものには、総柱建物跡SB62002、同建物に付随する西・北・東の雨落ち溝SD62013・62014・62046・62047、SB62002の西側で検出した溝SD62012・62015などのほか、南北方向に掘られた小溝群がある。

まとめ この調査では、長岡京の時代の遺構を中心に奈良時代の遺構も検出した。検出した遺構の内、総柱建物跡SB62002は、東西3間・南北3間の高床式の倉庫と考えられる建物で、溝SD62012・62015や柱穴内から布目瓦が出土していることから、瓦葺きであったことが考えられ、長岡京内の数少ない発見といえることができる。この建物の特徴としては、中央の東柱がまず2本建てられた時期があり、その後、4本の柱が立てられたと考えられることである。このことは、建物の機能が途中で変更されたか、収納するものの重量に対応した改築であったかも知れない。

(戸原和人)



調査地位置図(1/25,000)

## 23. <sup>しも うえ の みなみ</sup> 下植野南遺跡範囲確認調査

所在地 乙訓郡大山崎町下植野五条本(I K25次・I K25-2次・I K25-3次)・円明寺土辺  
(I K28次)

調査期間 平成10年5月12日～11月4日

調査面積 約1,030m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、名神高速道路大山崎ジャンクション建設予定地内における遺跡範囲の確認のための試掘調査で、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。

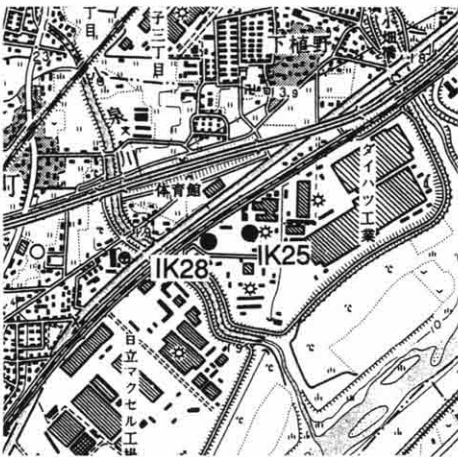
調査概要 調査成果は以下のとおりである。

### ① I K25-25-2次地点

調査地の標高は約12mで、地表下約5m(標高約7.0m)までの地層を確認した。各層から出土した遺物を見ると、第3層の中位では地震に伴う液状化と考えられる地層の渦巻き現象が認められる。これが「慶長の大地震」によるものであれば、第3層はそれ以前に堆積したものと考えることができる。第4・5層は13世紀以降の堆積で、東南東から西北西への流路の方向を持ち、流れの方向と砂礫の構成から、中世以降に調査地の東に流路を移動したと考えられている小畑川水系の氾濫によるものとみることができる。I K25-2次地点の第5層と第6層の間では、乙訓郡条里によって区画される水田遺構の畦畔を検出した。水田面には人や牛の足跡が残っており、第5層の砂礫によって埋まっていた。第10・11層は、11世紀以降の堆積で、西北西から東南東への流路の方向を持ち、小泉川水系の河川堆積と考えられる。第8層以下の断ち割り調査では、弥生時代および古墳時代以前の遺構は確認していない。(戸原和人)

### ② I K25-3次地点

調査地は、大山崎町下植野五条本地内にある。I K25-2次調査地点の北西に隣接したトレンチである。乙訓郡条里では、二条九里七坪にあたり、地名として残る上古(十九里)の小字の西側となる。I K25次・I K25-2次調査地同様、調査地の標高は約12m前後である。トレンチ西壁の粘土層で、条里に規制されたと考えられる東西方向の畦状の高まりを認めることができた。濁暗青灰色粘土層の厚い堆積下に奈良時代～古墳時代前期の遺構面(標高8.5m前後=地表下約3.4m)が遺存していた。平安時代前期までに埋没した溝S D01・S D03と古墳時代前期の土坑S K02、井戸跡S E05などの遺構を検出した。



調査地位置図(1/25,000)

S D01およびS D03からは、土器細片の出土を見ただけであったが、S K02からは小型丸底壺1個体が出土した。炭化物を伴っており、埋置した状態で検出した。S E05は、直径2.3~2.6m前後の、南北に長軸を持つ楕円の平面形を持つ素掘りの井戸跡である。遺構面から50cm下で直径1m前後にせばまり、1.6mほどで井戸底となる。井戸底には、布留式甕が10個体以上、垂直に堆積して出土した。甕の頸部には繊維質の紐痕が遺存する例が見られたことから、水汲み(釣瓶)に使用したものと見られる。掘削時の湧水と崩落が著しく、井戸底の崩落土層堆積状況は明確ではないが、水溜の甕が崩落土で埋没するごとに新しい甕を置いたものと思われる。I K25-2次調査で確認された竪穴式住居跡の柱穴が同時期のものであるならば、井戸の周囲に古墳時代前期の集落が営まれた可能性が高い。(野島 永)

### ③ I K28次地点

調査地の標高は約12.3mで、地表下約6.0m(標高約6.5m)までの地層を確認した。地表下約0.5mまでの盛り土層以下、標高約7.0mまではほぼ全体が砂礫と粘質土の互層による河川性の堆積である。調査地の北寄りでは、標高9~10m付近で青灰色の粘土と拳大の円礫を混ぜ、杭を用いて東西方向の用排水路を構築している。この粘土・礫層中からは瓦質の羽釜片が出土した。標高約7.0~9.5mまでの砂礫層からは、弥生土器・土師器・須恵器などが出土しており、土馬・ミニチュア竈片・布目瓦片が含まれるが、いずれも上流からの流れ込みの状態である。標高約7.0m以下では、上面で黄褐色粘質土になり、河川堆積の底面を示すマンガンの沈着が認められる。

まとめ I K25・25-2次地点での調査では、先に大山崎町教育委員会によって調査された右京第392次調査地のような明確な住居跡を検出することはできなかったが、I K25-3次地点では、古墳時代前期の土坑や井戸を検出することができた。今回の調査では、同時期の遺物や平安時代の遺物を出土するなど新しい知見もいくつかあった。本調査地の周辺部には、古墳時代前期を中心とした遺物を出土する遺構があるものと考えられ、下植野南遺跡の広がりを確認することができた。また、I K28次地点では、平安時代に流れていた小泉川の旧河道跡を検出した。

(戸原和人)

## 24. 木津川河床遺跡

所在地 八幡市八幡焼木地内

調査期間 平成10年11月17日～平成11年1月14日

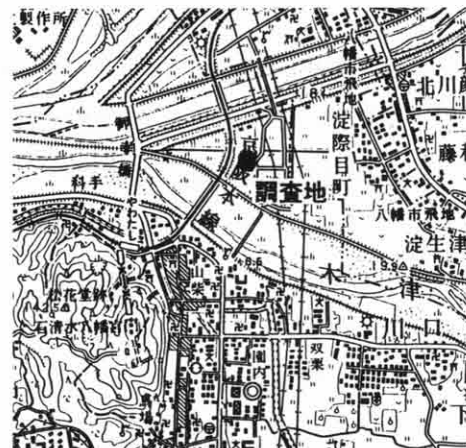
調査面積 約350m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、京都府洛南浄化センター内における急速ろ過施設増設に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、同センター内北西部に位置し、過去の発掘調査で弥生時代後期末や古墳時代後期～飛鳥時代の集落跡が確認されている部位からは北西方向に約200m離れている。このため、当初は、遺構・遺物の広がりなどについて不明な点が多く、その有無を確認することを目的として着手した(幅約8.5m・長さ約30mのトレンチ)。ところが、最終的に古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出し、南側へ拡張を行った。

調査概要 調査では、三面の遺構面を確認した。現地地表下約1.6mで中世後半～近世初頭頃(15～17世紀)、同約1.8mで中世前半(13～14世紀)の耕作地の痕跡をそれぞれ確認するとともに(第1・2遺構面)、同約2～2.4mで古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出した(第3遺構面)。中世後半の耕作地の痕跡としては、島畠の痕跡2か所とその周辺に展開した水田跡がある。また、中世前半の耕作地の痕跡としては、東西・南北それぞれに群をなして延びる幅30cm程度の素掘溝群であり、畑地の痕跡と判断した。一方、古墳時代前期の竪穴式住居跡は調査区の西半部で2基を確認したが、うち全容をほぼ確認できたSH01は、4.2m×4.4mの隅丸方形をなし、深さ約0.2mが遺存する。床面付近からは、布留式併行期の土師器甕・同高杯・小型丸底壺などが出土し、中央付近で炉跡を認めた。なお、この古墳時代前期の遺構面は西から東へゆるやかに低くなる状況が認められた。調査区の東端からさらに東側は沼状地形をなし、今回確認した古墳時代前期の集落の中心は調査区の西側へと広がるのであろう。また、中世末ないしは近世初頭頃の大地震による噴砂や曲隆(液状化した砂層が部分的に盛り上がったもの)なども確認した。

まとめ 今回の調査地は、これまでの調査で確認されていた集落跡からは、北西へ少し離れた部位に相当していた。ところが調査では、沼状地形をはさんで、さらに西側へ微高地が広がっており、そこに古墳時代前期の集落跡が展開していることが確認された。今後木津川河床遺跡を考える上で貴重な成果を得たと言えるだろう。

(森下 衛)



調査地位置図(1/50,000)



## 25. 興戸宮ノ前遺跡第3次

所在地 京田辺市興戸宮ノ前

調査期間 平成10年8月25日～10月29日

調査面積 約700m<sup>2</sup>

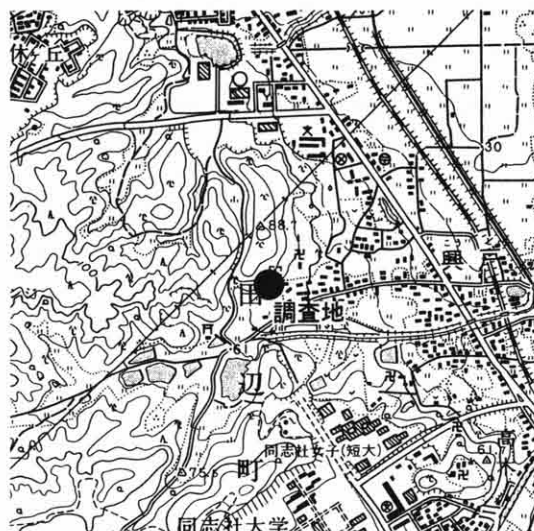
はじめに 興戸宮ノ前遺跡第3次調査は主要地方道八幡木津線建設工事に伴い、京都府田辺土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は丘陵の裾部で、北側が興戸古墳群の所在する丘陵、南側は扇状地である。調査地は現状では田畑となっている。

調査概要 第3次調査では中世の導水施設(木樋)や井戸などを検出した。木樋は長さ約5mで、排水部分には直径約30cmの曲物と石材が据えられ、水が濁らないような工夫が凝らされている。この水は、区画溝と考えられる溝S D03・14によって南へ流されるが、調査地はすでに耕作等によって削平を受けており、それに伴うような建物は復原できなかった。井戸S E69は石組み桶枠のもので、井戸枠の内径は64cm、検出面からの深さは約2mである。井戸からは、墨書土師皿とともに瀬戸・中国産天目茶碗や瓦質茶釜などが出土している。また、これらの他に墓となる可能性のある方形の土坑や曲物の底板が据えられた土坑を検出している。

今回の調査で特筆するものとしては、文字資料がある。S E69出土の土師皿は14世紀前半の資料であるが、口縁内面に「□南備□」と墨書されており、中世の神奈比信仰を考える上で重要な資料である。また、木樋に伴うS D14からは、花押と漢字仮名交じり、カタカナが書かれた墨書木板が出土した。木板は縦約8cm・横約7cmで、両面に墨書が認められるが、裏面は保存状態が悪く判読できない。これ以外にも直径12cmの曲物の底板に「川」と墨書されたものが出土した。

また、S D05からは障子の棧を連想させる用途不明の木製の組み物や、井戸からは漆碗、箸などが出土しており、木製品も豊富である。

まとめ 過去の調査でその存在が指摘されていた中世の遺構を、明確な形で確認することができた。特に神奈比信仰に関する遺物の出土は貴重な発見となった。また、古瀬戸や中国産天目茶碗などが出土したことから、当遺跡が中世の寺院である可能性が考えられたが、該当するような寺院の記録は周辺に残されていない。花押と文字の書かれた墨書木板が出土しており、寺院以外の施設についても検討が必要である。(藤井 整)



調査地位置図(1/25,000)

## 資料紹介

## 梅谷瓦窯跡出土の特異な道具瓦について

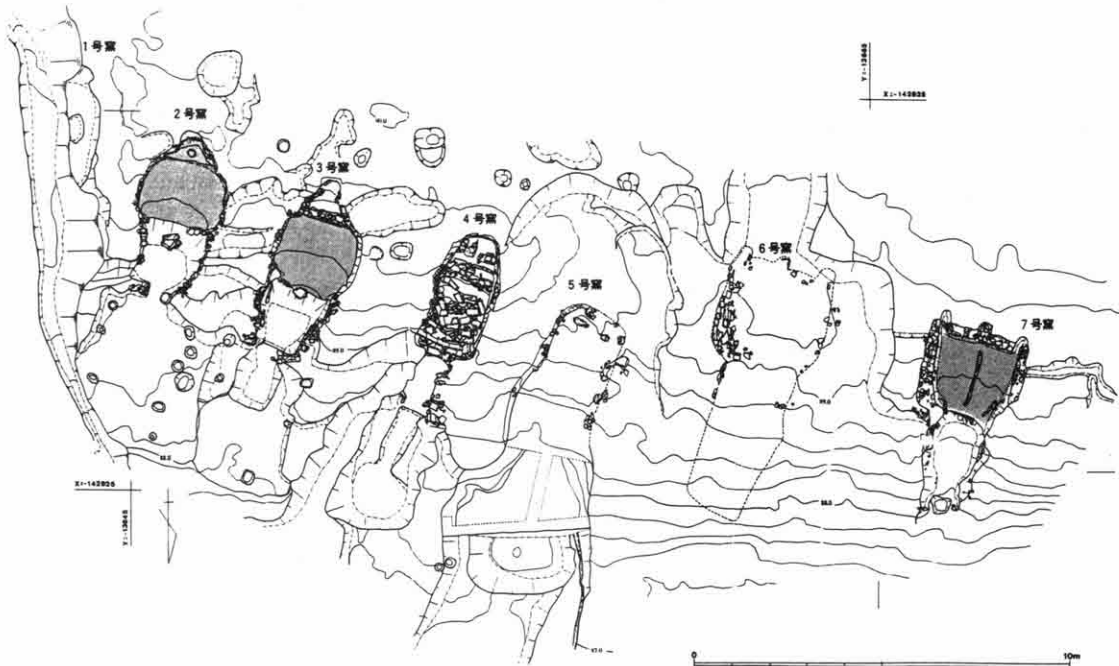
奥村 茂輝

## 1. はじめに

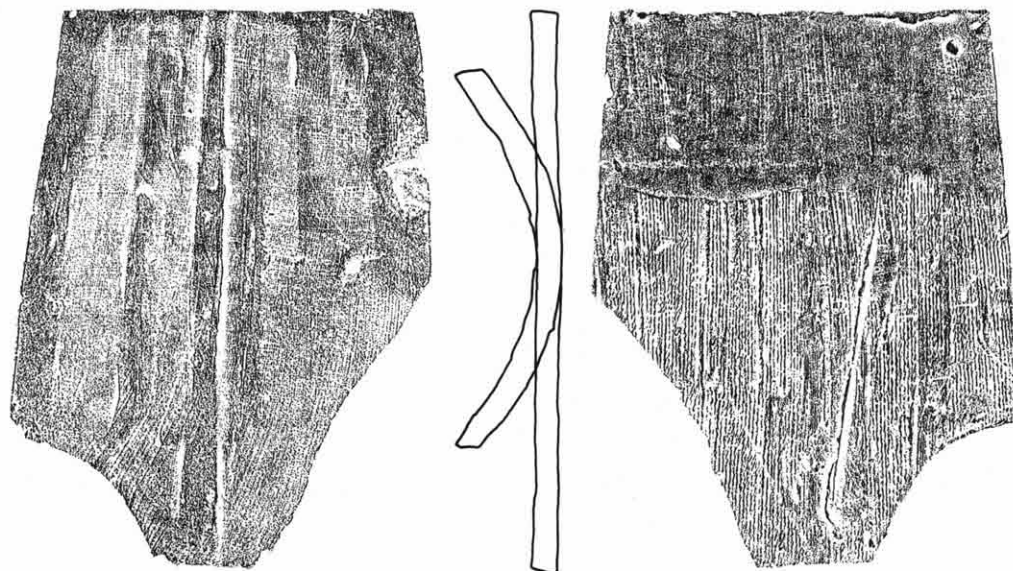
現在、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、関西文化学術研究都市の開発にともなって、発掘調査がなされた瓦窯跡(梅谷・瀬後谷・市坂・五領池東瓦窯跡)から出土した資料の整理を行っている。ここで紹介する資料は、その中の梅谷瓦窯跡(第1図)から出土した平瓦を整理する過程において、確認された道具瓦である。梅谷瓦窯跡は京都府相楽郡木津町の東南部に位置する。奈良時代には、平城京の北方に位置する平城山丘陵で数多くの瓦窯が操業されていたが(平城山瓦窯跡群)、梅谷瓦窯跡は現在確認されている平城山の窯跡のなかでは最も東端に位置している。ここからは平城宮式軒丸瓦6301A・D、同軒平瓦6671A・E・K、すなわち「興福寺式軒瓦」のセットが大量に出土している。このうち99%近くが6301A・6671Aの興福寺創建期の組み合わせである。この軒瓦6301A・6671Aの範傷と製作技法の検討から、当瓦窯が興福寺の創建期のなかでも最も早い段階に操業されたことがあきらかになっている。<sup>(注1)</sup>

## 2. 概要

道具瓦といえば鬘斗瓦や面戸瓦を思い起こさせるが、今回紹介する道具瓦は類例に乏しく、そ



第1図 梅谷瓦窯跡平面図



第2図 道具瓦拓本・実測図

の機能もはっきりとしないものである。出土地点は2号窯の燃烧部付近(西側)である。この道具瓦は成形・調整後の平瓦の広端隅を圆弧状に削り、加工している(第2・3図)。凸面は縄叩きをした後、狭端から幅12cm前後の部分に横ナデ調整を施し縄目痕を消す。凹面には布目痕と枰板痕が明瞭に認められる。梅谷瓦窯では同様の凸面の縄叩き痕を一部ナデ消し、

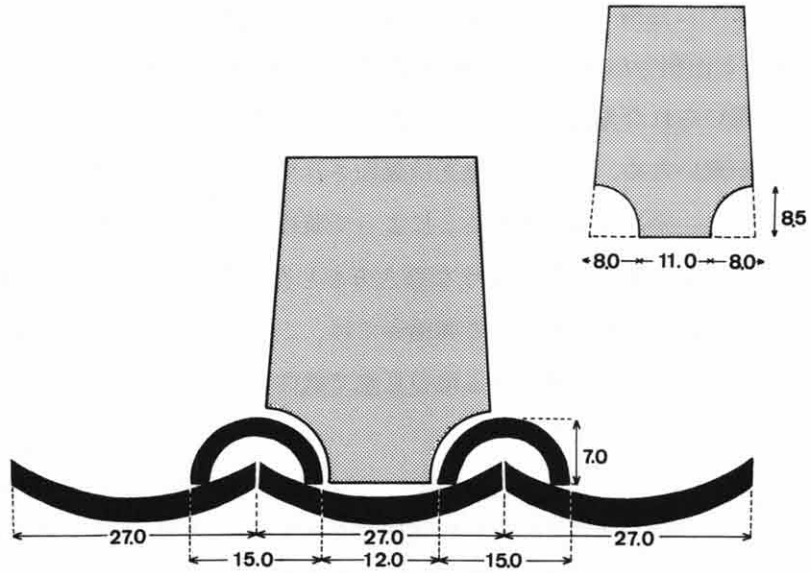


第3図 加工された広端隅部分

凹面に布目痕と枰板痕をもつ平瓦が多数を占める。これらの平瓦には粘土板の合わせ目(断面S字状のものとZ字状のもの二種)と、布の縦じ目のいずれか、または両方が確認できるものが数多くあることから、粘土板桶巻き作りで成形されたものと考えられる。したがってこの資料も粘土板桶巻き作りにより成形されたと考えて差し支えない。広端隅の削りは、広端を下にして凹面を正面にみた場合、左隅の部分が正円のほぼ1/4の形状をなすように、圆弧状に施されている。削り込みの角度から考えて、分割後桶型から外した後に凸型台上に置かれて削られたものであろう。ただ右隅部分は欠損しているため同様の加工がなされていたかどうかはわからない。どちらにせよ、この加工が平瓦以外の用途を想定した上のものであることは確かである。このように一見、普通の平瓦のように見えるが、成形・調整後の平瓦に明らかな加工を行っており、機能的には平瓦ではなく道具瓦と言えるものである。

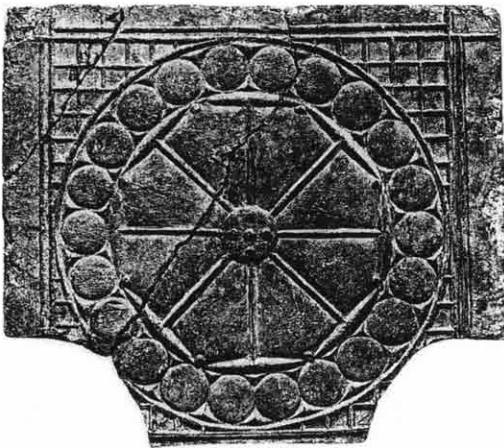
## 3. 機能

では一体この道具瓦は屋根のどの部分に葺かれたのであろうか。但し、この瓦は瓦窯から出土したものであるため、梅谷瓦窯の供給先である興福寺の屋根を飾っていたものではない。それでは、厳密にいうなら、一体どこに葺くことを目的として製作されたのであろうか。そのためには、右側

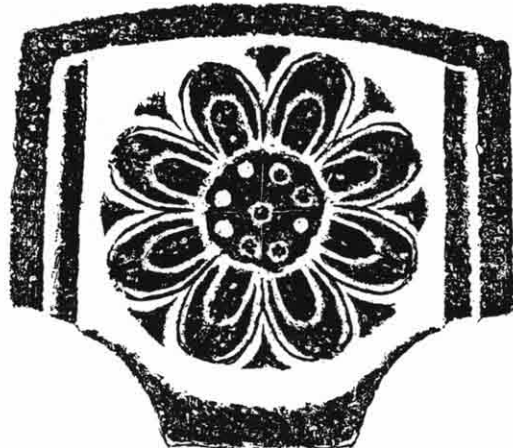


第4図 葺き上がり想定図(図中の単位はcm)

の隅部分が欠損しているため、二通りの可能性を考えなければならない。一つは円弧状の削りが片方の隅部分のみに行われていたとするものと、もう一つは両方の隅部分に行われていたという二通りである。ただ手がかりとなるのは、隅部分が正円のほぼ1/4になるように削られていることである。このくり抜かれた部分に梅谷瓦窯跡出土の丸瓦の筒部を合わせると、やや隙間はあるもののほぼぴったりとおさまる。したがって、両隅が削られている場合は両隅に丸瓦を合わせ、片隅が削られている場合は片隅のみに丸瓦を合わせることが目的に製作されたのではないだろうか。そこで以下のようにこの道具瓦が葺かれた状況を、梅谷瓦窯跡出土の平・丸瓦のサイズを考慮して復元してみた。今回の整理での計測の結果、平瓦の広端弦長は平均26.6cm、丸瓦の広端弦長は平均14.7cmであった。したがって、平・丸瓦それぞれの広端弦長を27.0cm、15.0cmと便宜的に定めて葺き上げの状態を想定してみたのが第4図である。第4図をみてわかるように、この道具瓦は両隅が削られていたと仮定すると、丸瓦と丸瓦の間にきれいにおさまる。逆に片側のみならば、削られていない方の隅は丸瓦にあたることになる。また計算の上だけでなく、実際に梅谷瓦窯跡出土の平・丸瓦を使用して葺き上げ状態を復原してもこの道具瓦はしっかり収まった。



第5図 奥山久米寺蓮華紋鬼瓦(注2文献より)



第6図 山田寺蓮華紋鬼瓦(注3文献より)

参考までに当例と同様の隅部分の形状をした鬼瓦の例として、奥山久米寺出土の蓮華紋鬼瓦(第5図)と山田寺出土の同じく蓮華紋鬼瓦(第6図)が挙げられる。したがってこの道具瓦は下り棟等に用いられた鬼瓦(板)に近い機能を持つものと考えられないだろうか。梅谷瓦窯跡では鬼瓦の出土が無い<sup>(注4)</sup>ため、おそらく鬼瓦は製作されていなかったと考えられる。そのため同様の機能を持つものを、平瓦を加工することによって製作していたとも考えられる。

しかし第4図に示したような葺き方をしたならば、支えになる箇所がなく非常に安定が悪い。また梅谷瓦窯の供給先である興福寺では、このような道具瓦は出土していない<sup>(注4)</sup>という。したがってこの道具瓦は生産地である梅谷瓦窯で試作されたのみで、興福寺では使用されることがなかった可能性が考えられる。

(おくむら・しげき=帝塚山大学考古学研究所)

注1 戸原和人「木津地区所在遺跡昭和60年度発掘調査概要 8.中ノ島遺跡(45地点)」(『京都府遺跡調査概報』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

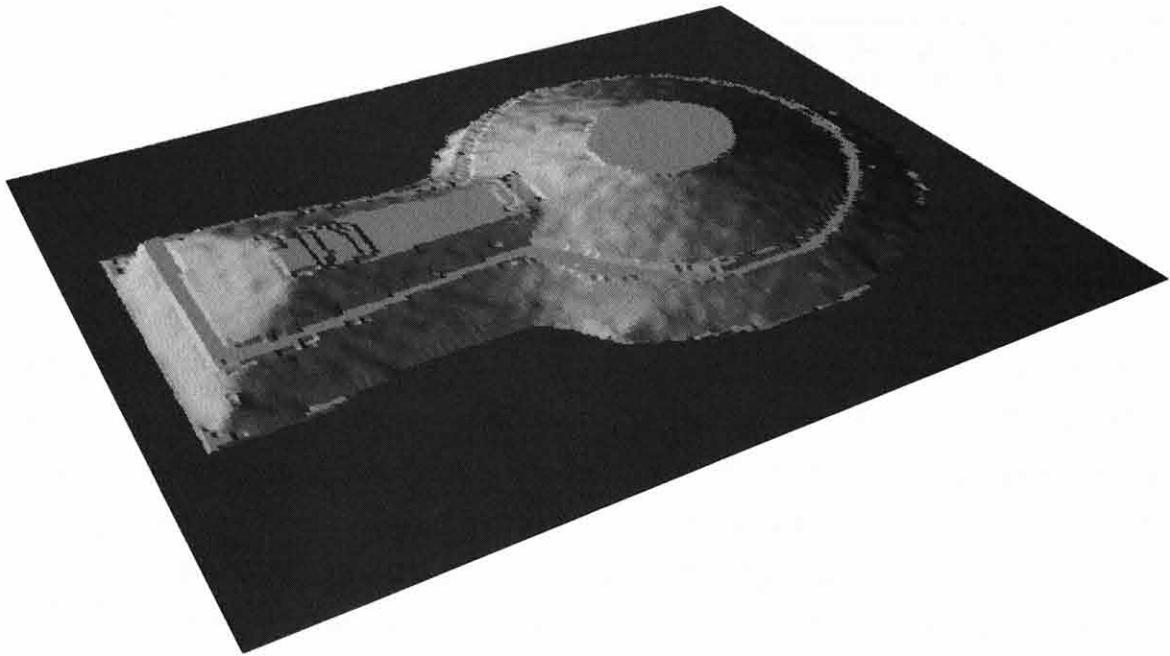
奥村茂輝「梅谷瓦窯の操業開始年代」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』I 帝塚山大学考古学研究所) 1998

注2 京都国立博物館『畿内と東国の瓦』 1990

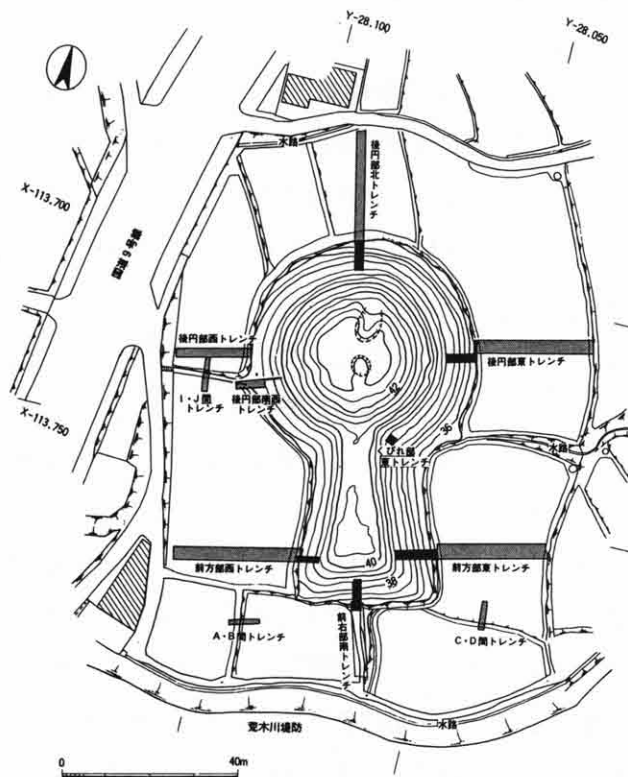
注3 奈良国立文化財研究所「発掘余録 山田寺蓮華紋鬼瓦」(『文化財論叢』) 1983

注4 興福寺、藪中五百樹氏の御教示による。





第2図 天皇ノ杜古墳の墳丘モデル



第3図 天皇ノ杜古墳墳丘測量図

墳・兵庫県神戸市五色塚古墳・京都府竹野郡網野町網野銚子山古墳であり、これらは「日葉酢媛類型」の前方後円墳として、4世紀末の代表的な古墳の形態と見なされる。この精美な墳丘を立体的に表現するために、パソコン上でデジタル墳形モデルを製作し、等高線図との表現の違いを対比してみよう。原図は(財)京都市埋蔵文化財研究所の天皇ノ杜古墳復原図を使用し、等高線を自動トレースさせ、それをメッシュ形式の標高データへと補完した。第2図は、高さを強調するために2倍に誇張している。古墳という3次元構造物の表現は、等高線だけではない。

古墳の案内 京都交通バス御陵町停留所下車。徒歩10分。史跡公園になっている。

(河野一隆)

参考文献

『山背の古墳 古墳の調査とその成果』京都市文化財ボックス第6集 京都市文化観光局文化財保護課 1981

佐原 眞・平良泰久・奥村清一郎・石井清司・杉本 宏『古代史探検—京・山城—』 京都書院 1994

## 長岡京跡調査だより・68

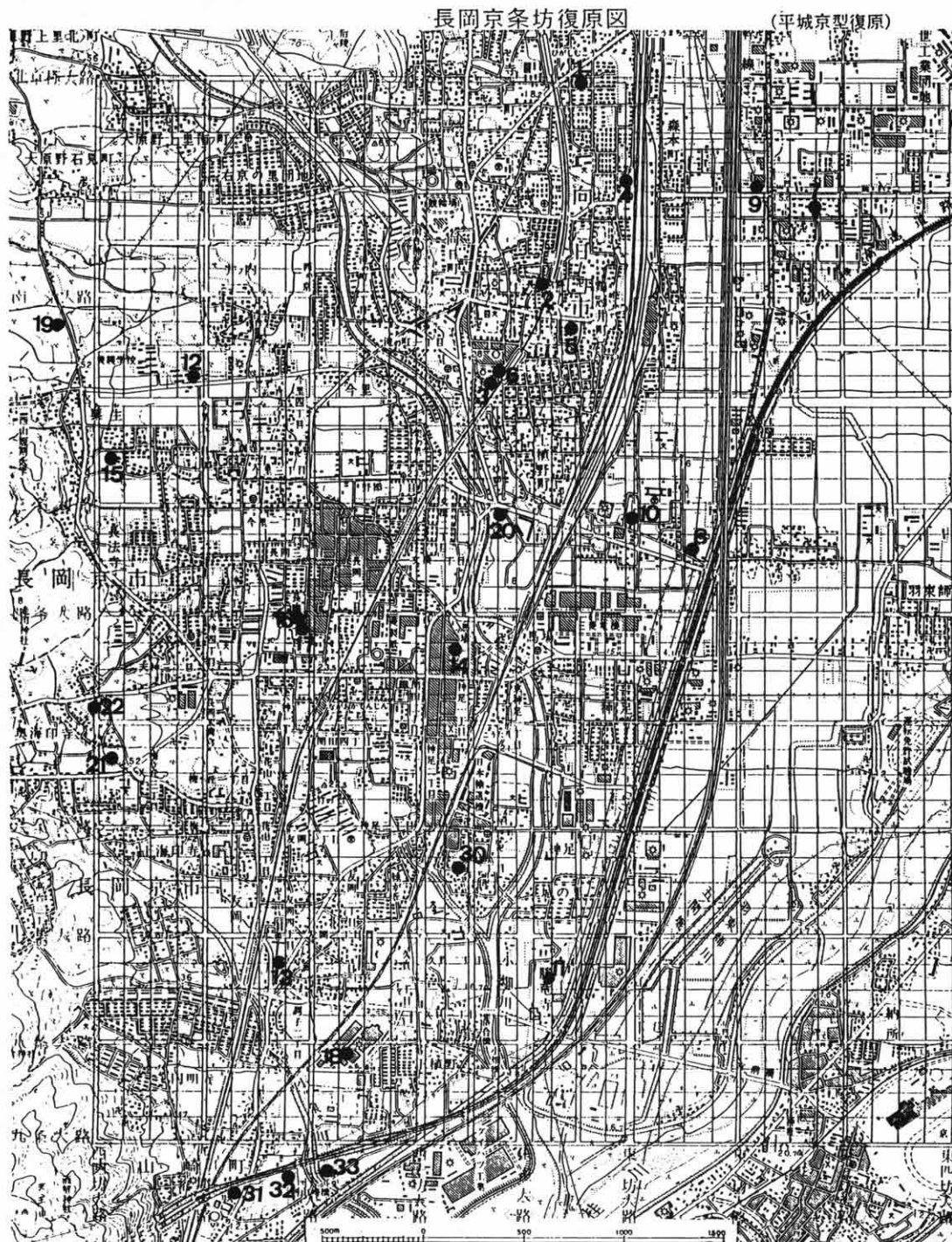
前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成10年11月25日、12月16日、平成11年1月27日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内6件、左京域5件、右京域12件であった。京外の12件を併せると35件となる。(米本光徳)

調査地一覧表(1999年1月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第369次	7ANBHC	向日市寺戸町東田中瀬15-18.37	(財)向日市埋文	10/26~11/20
2	宮内第370次	7ANEDN-7	向日市鶏冠井町大極殿26-26	(財)向日市埋文	11/4~11/12
3	宮内第371次	7ANFOC-7	向日市上植野町御塔道7-7	(財)向日市埋文	11/24~11/30
4	宮内第373次	7ANDST-5	向日市森本町下森本21-1.21-4	(財)向日市埋文	98.12/14~ 99.2/13
5	宮内第374次	7ANEHC	向日市鶏井町堀之内44-1	(財)向日市埋文	1/5~1/11
6	宮内第375次	7ANFOC-9	向日市上植野町御塔道2-2.2.3.3-2.44の一部、上植野町南開13-3.15-1.19-1の一部	(財)向日市埋文	1/11~3/12
7	左京第418次	7ANVKC-1	京都市南区久世東土川町178他	(財)京都市埋文	98.6/15~
8	左京第420次	7ANFKI	向日市上植野町北淀井3-1.3-2	(財)向日市埋文	10/13~11/17
9	左京第421次	7ANDTD-3	向日市森本町佃22他	(財)向日市埋文	98.11/2~ 99.1/末
10	左京第422次	7ANFKD-3	向日市上植野町北ノ田2-1	(財)向日市埋文	98.12/2~ 12/25
11	左京第423次	7ANQCK-2	長岡京市勝竜寺近竹7-4	(財)長岡京埋文	1/11~1/25
12	右京第615次	7ANIHJ-5	長岡京市今里蓮ヶ糸406	(財)京都府埋文	9/10~12/17
13	右京第616次	7ANNSN-6	長岡京市友岡4丁目18-1	(財)長岡京埋文	98.9/7~ 12/18
14	右京第618次	7ANLTR-6	長岡京市馬場1丁目17.11-11番地内	(財)長岡京埋文	9/28~11/10
15	右京第619次	7ANJKK-6	長岡京市長法寺北畠3-1	(財)長岡京埋文	10/12~11/6
16	右京第620次	7ANKNA-2	長岡京市長岡2丁目233番地の3	(財)京都府埋文	98.10/22~ 99.1/22
17	右京第623次	7ANKNA-3	長岡京市長岡2丁目224-1の一部	(財)長岡京埋文	1/7~2/15
18	右京第624次	7ANRUI-3	長岡京市調子3丁目1-1	(財)長岡京埋文	98.11/4~ 99.1/26 1/27~3/31
19	右京第626次	7ANGKM-1	長岡京市井ノ内鏡山7番地・今里回向場3番地	(財)長岡京埋文	98.12/7~ 99.1/31
20	右京第627次	7ANFDE-8	向日市上植野町堂ノ前13-1.14-1	(財)向日市埋文	1/11~1/29
21	右京第628次	7ANPTD-3	長岡京市奥海印寺谷田32-1他	(財)長岡京埋文	1/18~2/6
22	右京第629次	7ANPTM-3	長岡京市奥海印寺太鼓山42他	(財)長岡京埋文	1/25~3/25
23	久々相遺跡 第4次	7AKBUU	向日市寺戸町瓜生26-1	(財)向日市埋文	10/19~11/25
24	久々相遺跡 第5次	7AKBUU-2	向日市寺戸町瓜生20-1の一部	(財)向日市埋文	1/11~2/26
25	寺戸大塚古 墳第6次	4PHBSM-6	向日市寺戸町芝山2-5.2-6	(財)向日市埋文	6/29~10/31
26	向日市立会 第98092次	7ANDKD· DSD	向日市森本町上町田・下町田地内	(財)向日市埋文	11/19~11/24
27	向日市立会 第98107次	4ZKAKC	向日市物集女町北ノ口61-1.62-1	(財)向日市埋文	11/9・10
28	中海道遺跡 第49次		向日市物集女町	(財)京都府埋文	98.11/19~ 99.1/25



29	長岡京跡立 会第98118次		向日市鶏冠井町小深田38	(財)向日市埋文	
30	右京第630次	7ANMBZ-2	長岡京市神足2丁目地内	(財)長岡京埋文	1/27~
31	大山崎町第 29次	7YYMSDD- 4	大山崎町円明寺小字百々	大山崎町教委	98.12/27~ 99.3/31
32	算用田遺跡	I K 30	大山崎町円明寺小字井尻地内	(財)京都府埋文	98.12/7~ 99.2/初
33	下植野南遺 跡	I K 31	大山崎町下植野門田地内	(財)京都府埋文	98.12/14~ 99.2/17
34	山崎津跡第 13次	7YYMS' KD -5	大山崎町大山崎鏡田	大山崎町教委	1/11~1/20
35	大藪遺跡		京都市南区久世殿城町	(財)京都市埋文	7/1~



## センターの動向(10.11～11.1)

1. できごと
- 11.2 都出比呂志理事、下植野南遺跡(大山崎町)現地視察
- 4 下植野南遺跡(大山崎町五条本)試掘調査終了(5.12～7.28、9.21～)
- 5 浅後谷南遺跡発掘調査終了(4.20～)
- 7～14 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修「中国四川省成都・雲南省昆明ほか」、中川和哉・野島 永・石崎善久・河野一隆調査員参加
- 10 奈具岡遺跡第9次調査(弥栄町)関係者説明会  
左坂古墳群(大宮町)現地説明会
- 11 城山遺跡(木津町)発掘調査再開(6.29より中断)
- 12 左坂古墳群発掘調査終了(7.7～)
- 13 奈具岡遺跡第9次調査終了(8.18～)
- 16 職員研修(於：当センター)、講師：黒坪一樹主査調査員「網野町浅後谷南遺跡の発掘調査」
- 17 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 19 上田正昭理事・木村英男常務理事、余部遺跡現地視察  
中海道遺跡(向日市)発掘調査開始
- 20 余部遺跡(亀岡市)現地説明会
- 24～25 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京都)、木村英男常務理事、福岡利範事務局次長、安田主幹出席
- 25 長岡京連絡協議会
- 25～26 教員職出向職員研修「中丹・丹後の古墳」、講師：堤圭三郎理事、米本光徳・竹下士郎主査調査員、中村周平調査員
- 受講
- 26 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：大阪市)杉江昌乃・西林紀子・岡田正記主事出席
- 27 下植野南遺跡現地説明会  
桑原口遺跡試掘調査終了(10.12～)  
余部遺跡第5次調査終了(9.4～)
- 12.1 木村英男常務理事、市田斉当坊遺跡現地視察
- 4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修意見交換会、中川和哉・野島 永・石崎善久・河野一隆調査員参加
- 7 算用田遺跡(大山崎町)発掘調査開始
- 9 第54回役員会・理事会(於ルビノ京都堀川)、樋口隆康理事長・中澤圭二副理事長・木村英男常務理事・川上貢・上田正昭・藤井 学・都出比呂志・井上満郎・堤圭三郎・中谷雅治各理事出席  
芝山遺跡(城陽市)発掘調査開始
- 10 長岡京跡右京第615次・井ノ内遺跡(長岡京市)関係者説明会
- 11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：向日市)田代弘・河野一隆調査員出席  
平安京跡(朱雀高校：京都市中京区)発掘調査開始
- 15 今井城跡・今井古墳群(峰山町)発掘調査開始
- 16 長岡京連絡協議会
- 17 長岡京跡右京第615次・井ノ内遺跡発掘調査終了(9.10～)
- 1.6 長岡宮跡第372次(向日市)調査開始

- |   |   |
|---|---|
| <p>8 教員職出向職員研修「京都府南部の古墳」、講師：堤圭三郎理事、米本光徳・竹下士郎主査調査員、中村周平調査員受講</p> <p>13 長岡京跡右京第620次調査(長岡京市)現地説明会</p> <p>14 木津川河床遺跡発掘調査終了(11.17～)</p> <p>18 職員研修(於：当センター)講師：菱田哲郎京都府立大学助教授「転換期としての7世紀」</p> <p>21 出土品取扱基準検討会議(於京都府教育</p> | <p>庁)伊野近富企画係長出席</p> <p>22 太田遺跡(亀岡市)現地説明会、長岡京跡右京第620次調査終了(10.22～)</p> <p>25 中海道遺跡発掘調査終了(11.19～)上田正昭理事、太田遺跡現地視察</p> <p>26 算用田遺跡発掘調査終了(12.7～)</p> <p>27 長岡京連絡協議会</p> <p>28～29 京都府公益法人等運営協議会(於：府立ゼミナールハウス)福嶋利範事務局次長出席</p> |
|---|---|
- (小山雅人)

## コラム～デジタル化される考古学の世界～

インターネットによる犯罪がマスコミを賑わす昨今、情報化社会の波は確実に私たちに浸透してきている。考古学の世界でもそれは例外ではなく、E-メールで情報のやりとりをしたり、フロッピーディスク、CD-ROMの報告書も現れた。また、当調査研究センターはまだだが、ホームページを開設して情報発信を行っている機関も珍しくない。インターネットは、社会生活と同時に考古学の世界にも大きな変革をもたらすであろう。

今や、パソコンの前に座れば、トルコのアナトリア平原の新石器時代遺跡、南太平洋の水中考古学、フランス・ブルゴーニュ地域のリモートセンシング技術を使ったケルト遺跡の調査の情報が居ながらにして入手できる。また、外国の教育機関の考古学講座カリキュラムや、英国の雑誌『Antiquity』の目録で、求めるデータのありかを調べることができる。PDFをはじめとする電子文書の充実とハード・ソフトウェアが向上すれば、図書館に一日こもって調べものをする経験は(それはそれで、目指す本を見つけた喜びはひとしおなのだが)、過去のものとなるだろう。

同時に、個人では把握不可能なほど氾濫した考古学情報を、コンピュータによって検索し、必要な部分をオン・デマンドで印刷することも夢ではない。紙の刊行物は、発行部数・カラー写真の枚数など、多くの制限がある。また、報告書に付き物の膨大な観察表もデジタル化されていけば、もっと扱いやすいものになる。ただ、現在発行されている考古学の報告書をそのままハイパーテキスト(HTML)化しては、非常に使い勝手の悪いものになるかもしれない。そして考古学データの形式も恐らく変わらざるを得ないだろう。

例えば、発掘調査の測量では、20cmないしは25cm間隔の等高線を引くのが普通であるが、この地図表現では等高線どうしの高さが表現されない。国土地理院が発行する数値地図のファイルを開いてみると、無機的な数値データが格納されていて、それをビューワーソフトを通してみると、山や谷として表現される。これを遺構レベルでも十分に使えるほど精度が上がれば、等高線やセクション図などは、必要とする人が自分でコンピュータに引かせるものとなるだろう。

考古学の報告書とは、そのような、できるだけ加工の少ない元データの貯蔵庫(デジタル・アーカイブ)となるべきであり、最小限のテキスト・画像と多量の計測データを格納するものへと、将来的には取れんされていくのではないだろうか？

(河野一隆)

## 受贈図書一覧(10.8~11.1)

## 苫小牧市埋蔵文化財調査センター

美沢東遺跡

## 釧路市埋蔵文化財調査センター

東釧路第3遺跡、幣舞遺跡調査報告書Ⅲ、鶴ヶ岱4遺跡調査報告書、武佐川1遺跡調査報告書

## (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第267集 小幅遺跡第5次・第7次発掘調査報告書、同第268集 沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第269集 下尿前Ⅳ遺跡発掘調査報告書、同第270集 大鳥Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第271集 本内Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第272集 北野Ⅳ遺跡発掘調査報告書、同第273集 大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第274集 麦生Ⅲ・Ⅸ遺跡発掘調査報告書、同第275集 本内遺跡発掘調査報告書、同第276集 浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第277集 江刺家Ⅳ遺跡発掘調査報告書、同第278集 才津沢遺跡発掘調査報告書、同第279集 唐戸崎・唐戸崎Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第280集 小森林館跡発掘調査報告書、同第281集 大宮北遺跡・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書、同第282集 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報、紀要XⅧ

## 水沢市埋蔵文化財調査センター

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第9集 杉の堂遺跡群、同第10集 杉の堂遺跡、同第11集 鹿野遺跡、胆沢城跡、水沢市文化財報告書第31集 水沢遺跡群範囲確認調査、同第32集 水沢遺跡群範囲確認調査

## (財)いわき市教育文化事業団

年報7、いわき市埋蔵文化財調査報告第55冊 上ノ原経塚

## (財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

年報 第8号

## (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

20年のあゆみ、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第217集 南蛇井増光寺遺跡Ⅴ、同第233集 柴崎熊野前遺跡、同第235集 白井遺跡群—中世・近世編—、同第240集 長野原久々戸遺跡

## 埼玉県立埋蔵文化財センター

年報 平成9年度

## (財)東総文化財センター

(財)東総文化財センター発掘調査報告書第16集 新城跡、年報2、同3

## (財)印旛郡市文化財センター

(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第61集 龍角寺五斗葺瓦窯跡、同第109集 千曲輪ノ内遺跡、同第122集 本佐倉外宿遺跡、同第126集 石川館址発掘調査報告書、同第130集

墨新山遺跡、同第133集 南羽鳥遺跡群Ⅱ、同第134集 城次郎丸遺跡、同第135集 公津東遺跡群Ⅲ、同第139集 馬場扇作遺跡

## (財)香取郡市文化財センター

(財)香取郡市文化財センター調査報告書第48集 村田居山遺跡、同第51集 小見川城跡、同第52集 城山3号墳、同第53集 西大須賀コモ田古墳群、同第54集 中ノ台遺跡C地区、同第55集 向仲野遺跡、事業報告Ⅶ

## (財)君津郡市文化財センター

(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第126集 外箕輪遺跡Ⅱ、同第144集 百々目木B・C・清水頭・清水沢遺跡、同第145集 谷ノ台遺跡発掘調査報告書、同第146集 常代遺跡Ⅱ、同第147集 山谷遺跡2、同第148集 上泉遺跡群

## (財)千葉市文化財調査協会

年報8~10、新田遺跡、仁戸名遺跡、直道遺跡、山王遺跡、南河原坂窯跡群・鐘つき堂遺跡、南河原坂第3遺跡、台畑遺跡、染谷津遺跡・大森第1遺跡、芳賀輪遺跡、園生貝塚、海老遺跡、小中台A遺跡・牛尾舩遺跡、根崎遺跡、高品城跡Ⅰ

## (財)総南文化財センター

年報 No.10、下手Ⅱ遺跡、(財)総南文化財センター調査報告第36集 九ノ坪横穴墓群、同第37集 久原B横穴墓

## (財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター

平成10年度要覧、年報18、東京都埋蔵文化財センター調査報告第50集 多摩ニュータウン遺跡、同第55集 島屋敷遺跡、同第56集 多摩ニュータウン遺跡 No.942、同第57集 多摩ニュータウン遺跡 No.245・341遺跡Ⅰ、同第58集 多摩ニュータウン遺跡 No.344遺跡、同第60集 三吉野遺跡群Ⅰ

## (財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告14 長津田遺跡群Ⅲ、同18 宮ヶ瀬遺跡群XⅡ、同31 東向遺跡、同32 不弓引遺跡・鶴巻大椿遺跡・鶴巻上ノ窪遺跡ほか、同33 御屋敷添遺跡・南森一ノ崎遺跡・高森窪谷遺跡、同34 東富岡杉戸遺跡・東富岡北三間遺跡・上粕屋川上遺跡ほか、同35 下大槻峯遺跡、同36 池子遺跡群Ⅵ、同40 宮ヶ瀬遺跡群XⅣ、先人たちの軌跡、研究紀要3、公開セミナー記録集、平成9年度遺跡調査成果発表会、神奈川県遺跡範囲確認調査報告2、神奈川県立埋蔵文化財センター年報17、年報5 平成9年度

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 年報8

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

紀要5、同6、年報13、同14、(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23 穂高古墳群、同35 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡、同36 松原遺跡、埋蔵文化財センターの16年間

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要 第2号、新潟県埋蔵文化財調査報告第90集 関川谷内遺跡I

富山県埋蔵文化財センター

石のアクセサリ

(財)岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書第27集 塚遺跡、同第37集 今宿遺、同第40集 高見遺跡、同第41集 阿多粕遺跡、同第42集 湯屋遺跡、同第43集 沖田遺跡、同第46集 たのもと遺跡

(財)岐阜市教育文化振興事業団

(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第2集 北山3号墳、平成9年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書

各務原市埋蔵文化財調査センター

遺跡詳細分布調査報告書、各務原市遺跡地図

(財)土岐市埋蔵文化財センター

定林寺西洞古窯発掘調査報告書

(財)愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第75集 円通寺古墓、同第76集 東新規道遺跡、同第77集 東苅安賀道遺跡、同第78集 吉田城遺跡Ⅲ、同第79集 一色青海遺跡

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

六古窯の時代

(財)滋賀県文化財保護協会

第4回近畿ブロック埋蔵文化財研修会資料集

(財)大阪府文化財調査研究センター

大陸文化へのまなざし、三ツ島遺跡、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第10集 陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ、同第18集 下田遺跡、同第33集 山直中遺跡Ⅲ、同第35集 貝塚市東山丘陵遺跡群、河内平野遺跡群の動態Ⅳ、池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅨ、年報 平成9年度、図書目録(1994年12月27日現在)、大阪文化財論集

(財)八尾市文化財調査研究会

(財)八尾市文化財調査研究会報告59 植松遺跡・老原遺跡・竜華寺跡、同60 跡部遺跡・植松遺跡・亀井遺跡ほか、同61 小阪合遺跡・東郷遺跡・中田遺跡ほか、平成9年度事業報告、文化財講座記録集5

(財)枚方市文化財研究調査会

継体天皇と渡来人、20年のあゆみ、新版 図録・枚方の遺跡

(財)元興寺文化財研究所

三次元形状計測による文化財のデータ保存システム構築と応用、創立三十周年記念誌、いにしへの金工たち

桜井市立埋蔵文化財センター

纏向遺跡はどこまでわかったか?

島根県埋蔵文化財調査センター

上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡ほか、板屋Ⅲ遺跡、来待石石切場遺跡群、岩屋口南遺跡、門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡、石田遺跡Ⅲ、山ノ神遺跡・五反田遺跡、四ツ廻Ⅱ遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡、塩津丘陵遺跡群、勝負遺跡・堂床古墳、洪山池古墳群、荒船古墳群・荒船遺跡・本庄川流域条里遺跡(2)、風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書11、同12、年報Ⅵ、斐伊川放水路発掘物語 PART 4

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第143集 西本6号遺跡、同第158集 灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、同第159集 灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ、同第160集 千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書、同第161集 千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)、同第162集 中屋敷B地点発掘調査報告、同第163集 依崎城跡、同第164集 浅谷山東B地点遺跡・清水3号遺跡、同第165集 山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群、同第166集 法成寺サコ遺跡・法成寺本谷遺跡、同第167集 雨連古墳発掘調査報告書、同第168集 東ノ木遺跡発掘調査報告書、同第169集 住吉免・足谷、同第170集 一の谷第6・7号古墳、同第171集 寺之下遺跡、同第172集 大將軍遺跡発掘調査報告、同第173集 宮ヶ森第1～5号古墓、同第174集 原田遺跡、研究輯録Ⅷ、冠遺跡群

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡、川津一ノ又遺跡Ⅱ、空港跡地遺跡Ⅲ

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

埋蔵文化財発掘調査報告書第67集 斎院・古照、同第70集 火内遺跡・臥間遺跡、同第71集 四村日本遺跡、同第72集 西野春日谷遺跡・通谷池2号墳

(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書第62集 大峰ヶ台遺跡Ⅱ、同第63集 朝日谷2号墳、同第64集 和気・堀江の遺跡Ⅱ、同第65集 石井・浮穴の遺跡、同第67集 福音寺地区の遺跡Ⅱ、松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

年報5～7、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第12集 南浦遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書、同第22集 栄エ田遺跡、同第23集 尾立遺跡、同第27集 船戸遺跡、同第28集 具同中山遺跡群Ⅰ、同第29集 小籠遺跡Ⅲ、同第30集 介良遺跡、同第31集 陣山遺跡・陣山北三区遺跡、同第32集 八田神母谷遺跡、同第33集 山田三ツ又遺跡、同第35集 飛田坂本遺跡、具同中山遺跡群Ⅱ-1、同Ⅳ

(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

- 北九州市埋蔵文化財調査報告書第196集 小倉城跡2、同第200集 大島遺跡、同第210集 金山丸遺跡2、同第211集 堺町遺跡2、同第212集 金山遺跡O・IV区、同第213集 徳力土地区画整理事業関係調査報告11、同第214集 潤崎遺跡6、同第214集 金田遺跡、同第216集 永犬丸遺跡群2、同第217集 峠遺跡、同第218集 森山西遺跡、同第219集 乙丸宮ノ下遺跡、同第220集 上貫遺跡(C)1、同第221集 上貫遺跡(C)2、同第222集 小倉城下屋敷跡、研究紀要第12号、年報14
- 青森県教育庁文化課**  
青森県埋蔵文化財調査報告書第228集 根の山遺跡発掘調査報告書、同第246集 白砂・大沢遺跡発掘調査報告書、同第247集 青森県遺跡詳細分布調査報告書X、同第248集 十三湊遺跡Ⅲ、青森県遺跡地図
- 陸前高田市教育委員会**  
陸前高田市文化財調査報告書第17集 史跡中沢浜貝塚'93、同第18集 堂の前貝塚発掘調査報告書1、同第19集 貝畑貝塚発掘調査報告書、陸前高田市の指定文化財
- 仙台市教育委員会**  
仙台市文化財調査報告書第214集 養種園遺跡発掘調査報告書、同第217集 相ノ原・大貝中・川添東遺跡、同第229集 原遺跡、同第231集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(12)、同第232集 神明社窯跡ほか発掘調査報告書、同第233集 年報19
- 会津坂下町教育委員会**  
会津坂下町文化財調査報告書第48集 杉窯跡、同第49集 経塚館跡発掘調査報告書、同第50集 鎮守森古墳
- 栃木県教育委員会**  
栃木県埋蔵文化財調査報告書第118集 多田羅遺跡、同第188集 金山遺跡Ⅵ、同第199集 滝田本郷遺跡、同第205集 那須官衙関連遺跡Ⅴ、同第206集 下野国分寺跡XⅢ(遺物編)、同第209集 寺野東遺跡Ⅶ、同第210集 間々田地区遺跡群Ⅱ、同第211集 八木岡Ⅰ遺跡、同第213集 鮎田橋北遺跡、同第215集 西山遺跡、同第219集 西統橋遺跡、研究紀要第6号
- 前橋市教育委員会**  
中原遺跡群Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ、五代松峯Ⅱ遺跡、鳥取東原遺跡、鳥取福蔵寺遺跡、稲荷遺跡、上佐鳥中原前遺跡、下新田中沖遺跡、下新田中沖Ⅱ遺跡、山王若宮遺跡、芳賀東部遺跡、六供中京安寺遺跡・六供下堂木Ⅲ遺跡、川曲毘沙前遺跡、上泉太郎三前遺跡、平成6年度文化財調査報告書第25集、平成7年度文化財調査報告書第26集、平成9年度市内遺跡発掘調査報告書
- 群馬町教育委員会**  
群馬町埋蔵文化財調査報告第47集 国府南部遺跡群概報、同第49集 国分境Ⅳ遺跡、同第50集 東国分中道南遺跡、同第51集 町内遺跡
- 吉井町教育委員会**  
平成9年度 町内遺跡発掘調査報告書、天神下遺跡発掘調査報告書、長根遺跡群発掘調査報告書Ⅳ、同Ⅴ、長根遺跡群南原遺跡Ⅱ
- 東京都教育庁**  
学芸研究紀要 第14集
- 東京都北区教育委員会**  
北区埋蔵文化財調査報告第24集 七社神社前遺跡Ⅱ
- 武蔵野市教育委員会**  
御殿山遺跡
- 神奈川県教育委員会**  
神奈川県埋蔵文化財調査報告40
- 小田原市教育委員会**  
小田原市文化財調査報告書第65集 下馬下遺跡第Ⅲ地点、同第66集 平成7年度小田原市緊急発掘調査報告書、同第67集 欄干橋町遺跡第Ⅳ地点、同第68集 今井陣場跡・酒井陣場跡発掘調査報告書、千代南原遺跡第Ⅶ地点試掘調査報告書
- 長坂町教育委員会**  
長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 柳坪南遺跡・境原遺跡、同第16集 小屋敷遺跡
- 佐久市教育委員会**  
佐久市埋蔵文化財年報6、佐久市埋蔵文化財調査報告書第49集 根々井芝宮遺跡、同第58集 下穴虫遺跡Ⅰ、同第59集 市内遺跡発掘調査報告書1996、同第60集 曾根城遺跡Ⅱ、同第61集 割地遺跡、同第62集 野馬久保遺跡Ⅱ、同第63集 西大久保遺跡Ⅲ、同第64集 梨の木遺跡Ⅳ、同第65集 中宿遺跡
- 岡谷市教育委員会**  
榎垣外遺跡発掘調査報告書、間下丸山・禅海塚遺跡
- 富士見市教育委員会**  
富士見市文化財報告第46集 水子貝塚、同第48集 富士見市内遺跡Ⅴ、富士見市の庚申塔、富士見市遺跡調査会調査報告第42集 宮脇遺跡第20地点発掘調査報告書、同第45集 御庵遺跡第20地点発掘調査報告書
- 三条市教育委員会**  
三条市文化財調査報告書第9号 来迎寺遺跡Ⅱ
- 吉田町教育委員会**  
越後吉田町毛野賀多里第2～4号
- 氷見市教育委員会**  
県指定史跡阿尾城跡、氷見市埋蔵文化財調査報告第22冊 氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅳ、同第26冊 朝日山城跡
- 婦中町教育委員会**  
千坊山遺跡(3)、南部Ⅰ遺跡発掘調査報告
- 加賀市教育委員会**  
加賀市埋蔵文化財発掘調査報告第30集 八間道遺跡
- 小松市教育委員会**  
荒木田遺跡
- 野々市町教育委員会**  
上新庄ニシウラ遺跡、長池・二日市・御経塚遺

跡群、富樫館跡Ⅰ、栗田遺跡Ⅲ、上林遺跡

**多治見市教育委員会**  
大畑西仲根3号窯発掘調査報告書 多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第44号、北小木大谷洞31・32号窯発掘調査報告書 同第45号、大針塩井戸1号窯発掘調査報告書 同第46号、深山1号窯発掘調査報告書 同第50号、小名田西山3号窯発掘調査報告書 同第53号、大藪西山1・2・3号窯発掘調査報告書 同第59号、多治見市文化財保護センター研究紀要第4号

**古川町教育委員会**  
古川町埋蔵文化財調査報告第5集 杉崎廃寺跡発掘調査報告書

**静岡市教育委員会**  
ふちゅ〜るNo. 5、静岡市埋蔵文化財調査報告38 石原窪古墳群・石原窪1号墳、同39 有東遺跡、同47 東大谷1号墳

**豊橋市教育委員会**  
豊橋市埋蔵文化財調査報告書第46集 さんまい貝塚、同第47集 水神古窯灰原、同第49集 水神遺跡

**安濃町教育委員会**  
安濃町埋蔵文化財発掘調査報告5 大城遺跡発掘調査報告書

**彦根市教育委員会**  
山崎山城跡整備基本計画報告書、彦根市埋蔵文化財調査報告第25集 湖東焼窯場跡発掘調査報告書、同第27集 山崎山城跡発掘調査報告書、同第28集 平成6年度市内遺跡発掘調査報告書、同第30集 神ノ木遺跡、同第31集 段ノ東遺跡

**草津市教育委員会**  
草津市文化財調査報告書第29集 平成7年度草津市文化財年報

**栗東町教育委員会**  
栗東町文化財調査報告書第4冊 和田古墳群

**大阪市教育委員会**  
大阪の歴史と文化財 創刊号、平成8年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

**枚方市教育委員会**  
枚方市文化財調査報告第32集 九頭神遺跡、同第33集 枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1997、古代の枚方

**富田林市教育委員会**  
富田林市埋蔵文化財調査報告29

**泉佐野市教育委員会**  
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成9年度、泉佐野市埋蔵文化財調査報告50 湊遺跡、同51 上町遺跡、同52 宮ノ前遺跡

**能勢町教育委員会**  
平成9年度能勢町埋蔵文化財調査概要 能勢町文化財調査報告書第9冊、原田遺跡発掘調査報告書 同第10冊

**兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所**  
兵庫県文化財調査報告第113冊 叶堂城跡、同第123冊 伊丹郷町発掘調査報告書、同第125冊 北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ、同

第130冊 岩井城跡、同第133冊 与呂木遺跡、同第150冊 東武庫遺跡、同第155冊 下内膳遺跡、同第156冊 大釜瓦窯跡、同第157冊 小名田窯跡、同第160冊 塩壺西遺跡発掘調査報告書、同第163冊 小戸遺跡、同第164冊 有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ、同第166冊 田能高田遺跡、同第167冊 久野々遺跡、同第168冊 三条九ノ坪遺跡発掘調査報告書、同第169冊 音谷窯跡、同第170冊 山本北垣内遺跡、同第171冊 神出窯跡群、同第172冊 山宮遺跡、同第173冊 八多中遺跡・清水廻り遺跡、同第178冊 まるやま遺跡、同第180冊 八反田遺跡、同第135冊 玉津田中遺跡、同第151冊 西ヶ原遺跡、同第152冊 飾東2号墳、同第153冊 奥遺跡・宮ノ沢城跡・淡河上中遺跡、同第154冊 田井野遺跡

**神戸市教育委員会**  
平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報、住吉宮町遺跡、雲井遺跡、本山遺跡、ひょうご復興の街から

**小野市教育委員会**  
小野市文化財調査報告書第19集 王子辻ノ内遺跡発掘調査報告書、同第21集 県道住吉住永線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、同第22集 播磨国大部荘、東大寺サミットinおの

**三田市教育委員会**  
三田の文化財、三田市文化財情報 平成9年度合冊号

**川西市教育委員会**  
平成9年度 川西市発掘調査概要報告

**佐用郡教育委員会**  
平成8年度 埋蔵文化財調査年報

**田原本町教育委員会**  
田原本町埋蔵文化財調査年報6、田原本町埋蔵文化財調査概要16 唐古・鍵遺跡第61次発掘調査概報

**河合町教育委員会**  
宮堂遺跡Ⅱ 河合町文化財調査報告第11集、河合町の文化財、ナガレ山古墳

**和歌山市教育委員会**  
和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第6集 鷺ノ森遺跡第3次発掘調査概報、同第16集 中野遺跡第2次発掘調査概報、同第17集 木ノ本Ⅲ遺跡第9次発掘調査概報、同第18集 友田町遺跡第2・3次発掘調査概報、同第19集 秋月遺跡第6次発掘調査概報、和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報5

**倉吉市教育委員会**  
倉吉市文化財調査報告書第92集 福田寺遺跡発掘調査報告書、同第93集 後口山遺跡発掘調査報告書、同第94集 中峰古墳群発掘調査報告書、同第95集 向野遺跡発掘調査報告書、同第96集 河原毛田遺跡発掘調査報告書

**出雲市教育委員会**  
小山遺跡第2地点発掘調査報告書

**加茂町教育委員会**  
加茂岩倉遺跡発掘調査概報Ⅱ

## 総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財調査年報 8

## 北房町教育委員会

北房町埋蔵文化財発掘調査報告 7 大谷一号墳

## 邑久町教育委員会

史跡門田貝塚環境整備事業報告書

## 下関市教育委員会

下関市埋蔵文化財調査報告書66 長門国府跡

## 徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 8

## 高松市教育委員会

高松市埋蔵文化財調査報告第33集 弘福寺領讃岐国山田郡田関関係遺跡発掘調査概報Ⅱ、同第34集 日暮・松林遺跡、同第35集 弘福寺領讃岐国山田郡田関関係遺跡発掘調査概報Ⅲ、同第36集 境目・下西原遺跡

## 福岡市教育委員会

有田・小田部第30集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第547集、三苦遺跡群 3 同第548集、多々良込田遺跡Ⅳ 同第549集、箱崎遺跡 5・蒲田部木原遺跡 5 同第550集、箱崎 6 同第551集、吉塚 4 同第552集、吉塚 3 同第553集、吉塚 5 同第554集、吉塚 6 同第555集、博多61 同第556集、博多62 同第557集、博多63 同第558集、博多64 同第559集、博多65 同第560集、比恵遺跡群25 同第561集、比恵遺跡群26 同第562集、那珂遺跡20 同第563集、那珂遺跡群21 同第564集、雀居遺跡 4 同第565集、下月隈C遺跡 2 同第566集、板付周辺遺跡調査報告書第19集 同第567集、麦野B遺跡 同第568集、雑餉隈遺跡 4 同第569集、中南部(5) 同第570集、井尻B遺跡 6 同第571集、和田B遺跡Ⅱ 同第572集、野方岩名隈 1・藤崎12 同第573集、有田・小田部31 同第574集、野芥遺跡 2 同第575集、野芥遺跡 3 同第576集、入部Ⅶ 同第577集、松木田遺跡群 同第578集、金武古墳群 同第579集、吉武遺跡群Ⅹ 同第580集、野芥大藪遺跡第1次調査 同第581集、橋本一丁目遺跡第2次調査・橋本遺跡第1次調査 同第582集、国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ 同第583集、今山遺跡 同第584集、飯氏古墳群B群第14号古墳 同第585集、鴻臚館跡 9 同第586集、福岡市埋蔵文化財年報Vol. 11

## 太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第37集 大宰府条坊跡Ⅹ、同第38集 成屋形古墳、同第39集 太宰府・佐野地区遺跡群Ⅷ

## 津屋崎町教育委員会

津屋崎町文化財調査報告書第13集 勝浦北部丘陵遺跡群、同第14集 生家釘ヶ裏遺跡

## 福岡町教育委員会

津丸横尾遺跡 福岡町文化財調査報告書第11集、八並中原遺跡 同第13集

## 筑穂町教育委員会

上穂波遺跡群 2 筑穂町文化財調査報告書第5集

## 水巻町教育委員会

上二貝塚 水巻町文化財調査報告書第6集

## 二丈町教育委員会

二丈町文化財発掘調査報告書第3集 萩の原古墳群、同第4集 曲り田周辺遺跡Ⅰ、同第6集 曲り田周辺遺跡Ⅲ、同第7集 曲り田周辺遺跡Ⅳ、同第9集 木舟・三本松遺跡、同第10集 大坪遺跡Ⅰ、同第11集 大坪遺跡Ⅱ、同第12集 木舟の森遺跡、同第13集 曲り田周辺遺跡Ⅴ、同第14集 木舟・三本松遺跡Ⅱ、同第15集 木舟・三本松遺跡Ⅲ、同第16集 矢風遺跡第2次調査、同第18集 早田遺跡

## 佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第87集 金立遺跡Ⅱ、同第88集 久富遺跡・友貞遺跡・東千布遺跡、同第89集 牟田寄遺跡Ⅵ、同第90集 修理田遺跡Ⅱ、同第91集 若宮原遺跡、同第92集 東千布原遺跡、同第93集 坪の上遺跡Ⅰ、同第94集 コマガリ遺跡、同第95集 琵琶原遺跡Ⅱ、同第96集 佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書、同第97集 赤井手遺跡Ⅰ区・先立山遺跡Ⅰ区

## 鎮西町教育委員会

鎮西町文化財調査報告書第17集 鎮西層(第三紀)の巨木化石

## 三日月町教育委員会

三日月町文化財調査報告書第7集 石木中高遺跡、同第8集 土生遺跡Ⅰ、同第9集 土生遺跡Ⅱ

## 熊本市教育委員会

五丁中原遺跡、つつじヶ丘横穴群発掘調査概報Ⅲ

## 五木村教育委員会

五木村文化財調査報告書第4集 小浜遺跡

## 安岐町教育委員会

安岐町文化財調査報告書第4集 安旨遺跡、同第5集 吉松市場遺跡、同第6集 一ノ瀬古墳群、同第7集 光広遺跡、同第8集 両子寺関連遺構

## 日田市教育委員会

萩鶴遺跡 日田市埋蔵文化財調査報告書第9集、郷四郎遺跡 同第10集、会所宮遺跡 同第11集、牧原遺跡 同第12集、森ノ元遺跡 同第13集、三和教田遺跡 同第14集、馬形遺跡 同第16集、口が原遺跡 同第17集、日田市埋蔵文化財年報 平成5年度(1993年度)、同平成7年度(1995年度)、同平成8年度(1996年度)、小迫辻原遺跡、黎明の比多国

## 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

年報第3号、同第4号、土浦城二の丸・本丸試掘調査、井戸山遺跡確認調査報告書、根鹿北遺跡・栗山窯跡、神明遺跡 第1次・第2次調査

## 土浦市立博物館

紀要 第7号

## 玉里村立史料館

館報第3号、遺跡発掘速報展 部室貝塚、貝塚



- 人と暮らす海  
栃木県立博物館  
研究紀要第15号  
栃木県立なす風土記の丘資料館  
年報第6号  
栃木県立なす風土記の丘資料館  
ムラ・まつり・古墳  
かみつけの里博物館  
人が動く・土器も動く  
埼玉県立さきたま資料館  
資料館報No. 29  
国立歴史民俗博物館  
農耕開始期の石器組成3、同4  
大田区立郷土博物館  
芹沢銈介作品展  
調布市郷土博物館  
文字で見る明治の村  
(財)出光美術館  
館報第104号、研究紀要 第4号  
(財)五島美術館  
日本の三彩と緑釉  
長野県立歴史館  
古代シナノの武器と馬具  
上田市立博物館  
看板・暖簾・引札  
井戸尻考古館  
机原三本松遺跡、曾利遺跡、御柱尾根遺跡  
氷見市立博物館  
氷見ゆかりの人シリーズI、あおによし・しな  
ざる、氷見市近世史料集成第20冊 陸田家文  
書その五  
富山市日本海文化研究所  
紀要 第11号  
石川県立歴史博物館  
永光寺の名宝  
福井県立博物館  
ふくい発掘最前線  
静岡市立登呂博物館  
館報第8号  
浜松市博物館  
館報 第11号  
岐阜県博物館  
岐阜県博物館調査研究報告 第19号  
名古屋市博物館  
年報No. 21  
名古屋市見晴台考古資料館  
見晴台教室'97、発掘された名古屋の五世紀、  
年報15、曾池遺跡第2次発掘調査概要報告書、  
伊勢山中学校遺跡第7次発掘調査の概要、名古  
屋市文化財調査報告35 天白元屋敷遺跡、同36  
小幡遺跡  
豊田市郷土資料館  
拳母城 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第8  
集  
高浜市やきものの里かわら美術館  
平成9年度年報
- 斎宮歴史博物館  
平成9年度年報、斎王群行と伊勢への旅  
滋賀県立琵琶湖博物館  
近江はトンボの宝庫  
滋賀県立安土城考古博物館  
琵琶湖と中世の人々  
高島町歴史民俗資料館  
高島町文化財資料集19 町内遺跡IV  
大阪府立弥生文化博物館  
要覧平成9年度、卑弥呼の宝石箱  
大阪府立近つ飛鳥博物館  
大化の薄葬令、「装い」文化あれこれ  
大阪市立博物館  
木と人  
吹田市立博物館  
榎坂郷蔵人村の日々  
岸和田市立郷土資料館  
戦国武将岡部一族展  
柏原市立歴史資料館  
館報9、柏原市古文書調査報告第2集 安尾家  
文書目録、大和川・古代からのメッセージ  
八尾市立歴史民俗資料館  
高安城と古代山城、高安城と古代山城 資料集  
東大阪市立郷土博物館  
河内国へのいざない  
太子町立竹内街道歴史資料館  
西国巡礼と葉室組行者  
兵庫県立歴史博物館  
三万年の旅、館報 1997、塵界 第10号  
神戸市立博物館  
館蔵品目録考古・歴史の部14、同美術の部14、  
研究紀要第14号、年報No. 13  
明石市立文化博物館  
東アジアの古代屋瓦、発掘された明石の歴史展、  
明石市文化財年報 平成7年度  
西脇市郷土資料館  
童子山第5号  
西宮市立郷土資料館  
研究報告 第4集  
春日町歴史民俗資料館  
3万年のメッセージ 七日市遺跡、七日市遺跡  
シンポジウム資料  
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館  
UTAMAKURA  
香芝市二上山博物館  
二上山・他界との接点  
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館  
青銅器の世界、古代の調べ  
広島県立歴史民俗資料館  
ひろしまの古代寺院、道具と木のはなし、年報  
第19号  
下関市立考古博物館  
下関の弥生時代  
北九州市立考古博物館  
西と東の縄文土器  
伊都歴史資料館

- 伊都国発掘'98、前原市 市内遺跡等分布地図、泊桂木遺跡 前原市文化財調査報告書第64集、川原川右岸地区遺跡群Ⅱ 同第65集
- 佐賀県立博物館・美術館**  
調査研究書第19、21、22集、年報 第28号
- 佐賀県立名護屋城博物館**  
研究紀要第4号
- 熊本市立熊本博物館**  
館報No.10
- 大分県立歴史博物館**  
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書 第20集 六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅵ  
**ミュージアム知覧**  
館報第4号、紀要第4号
- 国立中央博物館**  
韓国美術上の虎、韓国伝統紋様1 基本編、同活用編
- 国立全州博物館**  
扶安竹幕洞祭祀遺蹟研究
- 東北学院大学東北文化研究所**  
紀要第30冊、要覧
- 専修大学考古学会**  
専修考古学 第7号
- 明治大学考古学博物館**  
江戸駿河台の旗本屋敷跡
- 早稲田大学考古学会**  
古代第105号
- 早稲田大学文化財整理室**  
下野谷遺跡Ⅰ
- 早稲田大学本庄校地文化財調査室本庄考古資料館**  
大久保山Ⅵ 早稲田大学本庄校地文化財調査報告6
- 明治大学博物館事務局**  
年報 1997年度
- 日本大学史学会**  
史叢 第59号
- 日本女子大学史学研究室**  
史艸 第39号
- 青山学院大学史学研究室**  
青山史学 第16号
- 金沢大学文学部考古学研究室**  
金沢大学考古学紀要 第24号
- 金沢医科大学歴史・人類学研究室**  
遺跡出土イルカ骨の計測値と非計測的形質による個別分析
- 南山大学遺跡調査保存会**  
南山大学大学院考古学研究報告第7冊 正木町遺跡、同第8冊 弥勒寺御申塚遺跡
- 神戸女子大学史学会**  
神女大史学 第15号
- 奈良大学文学部文化財学科**  
文化財学報 第16集
- 天理大学附属天理参考館**  
館報第11号
- 広島大学**  
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅳ
- 福岡大学人文学部考古学研究室**  
上臼井日吉古墳 碓井町文化財調査報告書第3集、五郎山古墳 筑紫野市文化財調査報告書第57集
- 忠南大専属博物館**  
発掘遺物特別展、鷄足山城、忠南大専属博物館叢書第8輯 開泰寺Ⅰ、同第10輯 神衿城、同第13輯 牙山國家工団忠南富谷地区考古・民俗調査報告書、同第14輯 天安長山里遺蹟、同第15輯 大田鳳鳴・長垆土地区画整理事業地区内考古・民俗調査報告、同第16輯 大田捨工場・永同補修基地豫定敷地内考古・民俗調査報告、釜慶大専属博物館遺蹟調査報告第3輯 金海大成洞焼成遺蹟
- 慶南大専属博物館**  
蔚山無去洞玉岷遺蹟
- 嶺南大専属博物館**  
嶺南大専属博物館學術調査報告第22冊 慶山林堂地域古墳群Ⅲ
- (社)日本金属学会附属金属博物館**  
紀要 第30号
- 大宮市遺跡調査会**  
大宮市文化財調査報告第44集 大宮の板石塔婆Ⅲ、同第45集 八雲貝塚、大宮市遺跡調査会報告第59集 峰岸北遺跡、同第60集 八雲貝塚、同第61集 B-3号遺跡、同第62集 A-61号遺跡、同第63集 中川貝塚、同第64集 大和田本村北遺跡
- 東京国立文化財研究所**  
上野忍岡遺跡群、X線フィルム目録Ⅰ
- 国立国会図書館**  
日本全国書誌 通号2197、2198、2208、2210号
- 都立学校遺跡調査会**  
小石川駕籠町遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、本郷元町Ⅱ、日影町Ⅰ、岡本前耕地遺跡
- 足立区伊興遺跡調査会**  
足立区北部の遺跡群
- 文京区遺跡調査会**  
文京区埋蔵文化財調査報告書第15集 神明町貝塚、同第16集 真破遺跡
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会**  
千駄ヶ谷五丁目遺跡2次調査報告書
- 雨間地区遺跡調査会**  
雨間地区遺跡群
- 豊沢貝塚遺跡調査会**  
豊沢貝塚第2地点発掘調査報告書
- (財)韓国文化研究振興財団**  
青丘學術論集 第13集
- (株)平凡社**  
日本骨董大図鑑
- 雄山閣出版(株)**  
東国の装飾古墳
- 朝日新聞社出版局**

- アサヒグラフ 通巻4007号  
**鎌倉考古学研究所**  
横小路周辺遺跡、台山藤源治遺跡第2次調査報告、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書、若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 小町1丁目81番8地点、同小町1丁目322番地点、同小町1丁目1028番1地点、下馬周辺遺跡発掘調査報告書、長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 由比ヶ浜三丁目2番200地点、同由比ヶ浜三丁目228番2他地点、北条時房・顕時邸跡発掘調査報告書、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書、長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書、若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書(小町2丁目12番15地点)、若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書(御成町788番3外地点)、永福寺跡、多宝寺跡  
**厚木市秘書部市史編さん室**  
厚木市史 古代資料編(2)  
**玉川文化財研究所**  
塚場遺跡第2次、森上遺跡第I・II・III地点、月見野遺跡群第11地点、県営羽沢東団地内遺跡、上今泉横穴墓群、諏訪町A遺跡  
**富山市日本海文化研究所**  
紀要 第12号  
**全国天領ゼミナール事務局**  
第13回全国天領ゼミナール記録集  
**浜松市埋蔵文化財調査事務所**  
宇藤坂古墳群  
**長浜市文化財事務局**  
長浜市埋蔵文化財調査資料第15集 墓立遺跡II、同第16集 川崎遺跡I発掘調査報告書、同第22集 北郷里小遺跡、同第23集 下坂中町遺跡  
**(株)河原書店**  
茶道雑誌 第62巻第8号  
**(財)古代学協会**  
古代文化 第50巻第9～12号、古代学研究所研究紀要 第7輯  
**(財)泉屋博古館**  
紀要第十五巻  
**ニッポングラフ新聞社**  
上下水道界 1、7月号  
**名神高速道路内遺跡調査会**  
名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第5輯 大蔵司遺跡・真上遺跡発掘調査報告書、同第6輯 土室古墳群発掘調査報告書、同第8輯 耳原遺跡・五日市遺跡発掘調査報告書  
**郵政考古学会**  
郵政考古紀要第25冊  
**妙見山麓遺跡調査会**  
清水・山城遺跡、灘・八幡遺跡I  
**六甲山麓遺跡調査会**  
廿日市市 宗高尾城跡・丹渡尾城跡  
**奈良国立文化財研究所**  
発掘庭園資料 奈良国立文化財研究所史料第48冊、奈良国立文化財研究所年報 1998-I～III、官営工房研究会会報5、飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(13)、平城宮発掘調査出土木簡概報(34)  
**(財)由良大和古代文化研究協会**  
研究紀要第4集  
**奈良日日新聞社古代研究編集室**  
月刊古代研究 第2号  
**木簡学会**  
木簡研究 第20号  
**朝鮮学会**  
朝鮮学報 第167、168輯  
**島根県古代文化センター**  
神々の国 悠久の遺産、出雲神庭荒神谷遺跡、古代出雲の文化、古代出雲文化展 活動の全記録、古代文化研究第6号、古代文化叢書4、しまねの古代文化第5、古代出雲文化展  
**島根考古学会**  
島根考古学会誌 第15集  
**岡山県古代吉備文化財センター**  
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告135 池田散布地・石塔鼻散布地ほか・阿知境遺跡ほか、岡山県埋蔵文化財報告28  
**博物館等建設推進九州会議・編集委員会**  
文明のクロスロード Museum kyushu 通巻61号  
**京都府教育委員会**  
千年の都  
**久美浜町教育委員会**  
谷垣古墳群 京都府久美浜町文化財調査報告第20集  
**大江町教育委員会**  
大江町文化財調査報告書第5集  
**三和町教育委員会**  
地域の歴史を記録する  
**長岡京市教育委員会**  
長岡京市文化財調査報告書第38冊  
**京都市歴史資料館**  
京都市所有の国宝・重要文化財、紀要第14号、同第15号  
**丹後町古代の里資料館**  
縄文の美  
**綾部市資料館**  
綾部市遺跡地図、綾部市文化財調査報告第25集、同第26集、館報平成7年度、同平成8年度  
**亀岡市文化資料館**  
花嫁のいろどり  
**向日市文化資料館**  
向日市古文書調査報告第七集、館報第13号  
**大山崎町歴史資料館**  
京都の城・乙訓の城  
**宇治市歴史資料館**  
宇治名所図会  
**城陽市歴史民俗資料館**  
絵図が語るふるさとの景観  
**京都府立山城郷土資料館**  
発掘成果速報 平成9年度の調査から、南山城

の鉄道100年  
**佛教大学**  
 文学部論集第82号  
**立命館大学文学部考古学研究室**  
 立命館大学考古学論集Ⅰ  
**同志社大学歴史資料館**  
 館報 創刊号  
**京都大学考古学研究会**  
 第49とれんち  
**平安学園考古学クラブ・平安学園教育研究会**  
 研究論集 第41号  
**(財)京都府文化財保護基金**  
 建造物保存修理の世界  
**山城ライオンズクラブ**  
 椿井大塚山古墳  
**(財)京都ゼミナールハウス**  
 安定社会の総合研究 ことがゆらく・もどる/  
 なかだちをめぐって  
**亀岡市史編さん室**  
 新修 亀岡市史 資料編第五卷

**足利健亮**

景観から歴史を読む 地図を解く楽しみ

**穴沢味光**

史峰 第24号

**植村善博**

京都市周辺の地震災害危険度マップの作成

**大野左千夫**

古代探求 森浩一70の疑問

**川西宏幸**

A K O R I S

**河野一隆**

宇藤坂古墳群、中期古墳の展開と変革、永平寺町埋蔵文化財調査報告書第1集 ほ場整備事業関連遺跡調査報告書、北陸自動車道関係遺跡調査報告書No.13、第13回発掘調査報告会資料、文京遺跡シンポジウム、八木町文化財調査報告書第4集 池上遺跡発掘調査概要、考古学フォーラム6、同10、竹野町文化財パンフレット1 鬼神谷窯跡、鞠智城跡、熊本県文化財調査報告第151集、奈良国立文化財研究所概要1998

**小山雅人**

考古学論考、埋蔵文化財研究会第40回記念研究集会 発表要旨集

**須田久重**

須田家住宅保存修理工事報告書

**土橋 誠**

人文科学とコンピュータ「公募研究」申請のてびき、『じんもんこん』第1号、人文科学とイメージ処理、「人文科学とデータベース」1998、京都大学大型計算機センター 第52回研究セミナー報告

**森島康雄**

出土銭貨第10号、中近世土器の基礎研究ⅩⅢ

**畑美樹徳**

長浜市埋蔵文化財調査資料第23集 下坂中町遺

跡

**堀田啓一**

石宝殿古墳の謎に迫る、橿原考古学研究所第15回公開講演会資料

**松井忠春**

天平

**安田正人**

中国地震考察団講演論文集、1977年地震学会訪中代表団報告書、弘明集研究 卷中

**山岸洋一**

糸魚川市埋蔵文化財調査報告書29 長者ヶ原遺跡

**山崎京美**

遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究

## 編集後記

情報71号が完成しましたので、お届けします。

今号の編集は2月なのですが、窓の外には、しんしんと雪が降り積もっています。読者の皆様のお手元に届く頃には、春の便りがちらほらと、聞かれる頃でしょうね。

今号は、当調査研究センターの調査・整理の過程で気付かれた、いろいろな問題を、各執筆者に膨らませてもらいました。京都では、マスコミが殺到するような目立った調査は少ないのですが、一見、地味な成果の中に、重大な問題が潜んでいることもあるのです。そんな、「いぶし銀」の調査成果にも本誌は光を当てていきたいと思います。どうぞ、ご愛読ください。

(編集担当＝河野一隆)

## 京都府埋蔵文化財情報 第71号

平成11年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel (075)441-3155 (代)



**KYOTO**  
**ARCHAEOLOGY CENTER**